
☆ 3 4 i s m a d e u p o f a t e a c h e r ☆

wokagura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

☆34ismadeupofateacher☆

【Nコード】

N9915V

【作者名】

wokagura

【あらすじ】

「34人は一人の先生で成り立っている」 ※これは『約束』という話の続編ですが、初めて見る方のためにそれまでのあらすじを書かせていただきます。 2年生担任の時は生徒に大変迷惑をかけたしまった数学教師・駿河逞真。3年生の担任になった今、生徒たちに恩返しのためでたくさんの思い出を作らせてあげようと始めた、卒業までの1年間の物語。

第1話 『約束』（前書き）

初めは主人公・駿河逞真の視点です。『約束』の大まかなあらすじです☆

第1話 『約束』

北中学校2年3組の担任をしていたころは、大変生徒に迷惑をかけてしまった。

そう話すこの私は、現在北中学校の数学教師を務めさせていただいている駿河逞真^{するがたくま}だ。これから、今言い掛けたことについて語らせてもらってもいいだろうか。

当時の私は27歳。教師となって5年目だったがまだまだ青二才だった。普段、生徒には厳しく、教育方法も比較的厳しいやり方をしていた。それはまだいいのだが、あまりにも厳しすぎてしまい生徒に嫌われつつあったのだ。影でのあだ名は”鬼教師・駿^{する}T”当時の私もそれについてはとっくの間に気づいていた。自覚しているんだ。性格はぶっきらぼうで思ったことを上手く言えない。また頑固で我儘。そして、生真面目だということ。

しかし、自分のやり方はやめなかった。と、いうのも深いわけがあった、以前新任教師のときに取り返しのないことをしたんだ。

その時の私の性格は真逆で、割と明るく、生徒との仲を優先しようとした。そして色々と生徒と協力してより良い学校生活にしようと考え、実行していったのだが、それは少し教育法に反することだったらしく、辞めざるをえなくなった。また、いじめている生徒を止めようとして手首を掴んで誤ってその生徒の手首を折ってしまった。そして軽い誤解、生徒との恋愛関係とかいう噂が流れ、対処に困った。

そうしているうちに、私は教育委員会に止めてもいいということ
を報告された。もし、続けるとしても教育方法を変えていかなけれ
ばならないと言われ、私は絶望した。しかし、教師を辞める訳には
いかなかったんだ。だから、教育方法を変えてでも続けようと決心
した。

そして、その当時に至るわけだ。

そして、そんな初夏のこと。私の人生をくつがえすようなことが
起こった。

呼び出しされたため、行ってみると、そこには見知らぬ美しい女
性がいた。しかも話を伺う前になんと口付けしてきたのだった。私
は職員室の職員たちに誤解されたと知りつつも場所を変え、二人き
りで再び話すことにした。

その女性が言うには、私と彼女は深く愛し合っていたらしい。全
然わからなかったのだが、

「駿君鈍いよね。昔から変わってない。」

などと言われ、あることを思い出したんだ。

私は中学生のころ、ある女子、坂下萌とある約束をしたんだ。
さかじたもえ

” 離れ離れになるけど、次に逢うときは二人の運命を誓おう ”

そのころのクラスは酷くてね。彼女もいじめられた対象で、私は
なんども萌を助けたんだ。そのせいか、二人の距離は縮んでいつて、
ついには両想いになったんだ。

しかし、萌が引越すことになり、その際に約束をしたわけだ。

彼女の綺麗な容姿や上品な話し方が、その女性に物凄く似ていた。だから悟ったんだ。萌が、約束を果たしに逢いに来たんだ、と。

そうとわかった私は自らの家に呼び、二人で語り合った。現在萌はピアノの講師をしているらしい。一度引越したが、仕事でここに戻ってきたそうだ。萌は本当に美しくなっていた。

約束をかなえてくれるか訊かれたが、私は保留にしておいた。何故なら、もし、今の生活から萌との生活になったとすれば、自分の教師人生が左右するかもしれない、と考えたからだ。

しかし、萌との付き合いは深くなっていた。

出逢った日からしばらくが経ち、もう秋になった頃、萌が呟いたことにより、私は途端に萌が急激に愛しく思えてしまった。よく覚えていないが、その後、酒を含んで萌のことを抱いてしまったらしい。

それを知った私は物凄くショックだった。これはまずい、罪滅ぼしをしなくては、と今度は本心から萌との性行為を臨んだ。萌も察してくれて、快く引き受けてくれた。

でも、甘かった。私は萌と深く関わってしまったために自分の心が緩んでしまった。以前までのように生徒に厳しくできず、新任の頃のようになっていたってしまったのだ。それは避けたかった。性格まで変えてきた意味がないじゃないか、これでは生徒の人生を狂わせてしまう、と。

だから私は決意した。萌と別れることを。萌は私の幸せを願い、

私の我俣を許してくれた。そして再び約束したんだ。

” 仕事と恋愛のバランスがとれるようになり、そのときでもまだ想い合っていればまた逢おう”

その後、私は今まで通りに戻ったはずだった。しかし、違った。

私は何かの緩みにより生徒たちに誤解をさせてしまったのだ。それにより、生徒からの暴力を受け、無視され、軽蔑されるようになった。その当時顧問をしていた女子バスケットボール部も不満だらけになり、無期限停止にした。

私は精神的にも苦痛を受けた。だが、負ける訳にはいかなかった。萌との約束が果たせなくなるから。最後まで粘りぬくつもりだったが、体はいうことを聞いてくれず、仕方なく一週間休養を取ることにした。そのあいだに同居している妹にもたくさん迷惑をかけてしまったが、そのおかげもあり、体調は優れていった。一週間後にはすっかり治っていて、生徒の暴力にも無視にも負けないようになった。

そして、誤解についてのほどぶりも冷めていった頃、発覚したことがあったんだ。

” 萌が、妊娠した……”

本当に、なんて言っていないかわからなくなった。別れたはずなのに、別れることができない……。今の私が逢う筋合いはない思っただが、確かめたくて、萌に逢うことにした。

萌は、他の男に告白されているときだったが、私が来て、驚きのあまり泣いていた。だから私は萌を精一杯抱き締めた。萌は、私を受け入れてくれた。本当に妊娠していてしかも私の子であるのは確かだった。しかし、萌は私が生徒とのバランスが取れていないため、まだ約束は叶えられないと言ってきた。でも、私は気づいた。萌が

いようがいまいが生徒を狂わすのには変わりなかったことに。だから萌が必要だと言った。萌は、私のことを思って、再び付き合うことを許してくれた。

それから、誤解の事実がわかり、生徒とも許しあった。また、前のように仲のいい学級に戻っていった。

そして、4月。私と萌は結婚式を挙げた。すべての約束が、その時叶えられることができたんだ。

次回からの話はそれから少し経って、3年生となった生徒たちとの物語。

第1話 『約束』（後書き）

この話についての詳細は、是非『約束』を見てみてください！
次回からは、無視点の本編に入っていきます。
これがら、どうぞよろしくお願いします☆

第2話 駿河学級・再び

4月の新学期当日。逞真は暖かな日差しと舞い散る桜の中で深呼吸した。

「今日から、また新しいスタートか。」

「駿河先生、おはようございまあゝす!!」

「おはよう。」

逞真は微笑んで学校に入っていた。

教室の扉を開けると、見慣れた生徒たちがわいわいと騒いでいた。

「あ、駿Tだ！おはよーです！」

「おはよう。初っ端から元気がいい連中だな。」

「へへ♪だってまたこのメンバーで集まれるの、めっちゃ楽しみにしてたんだもん！」

「フツ、そうか。」

そして、朝の会の時間になった。

「気を付けー、おはよーございませーす！」

『おはよーございませーす！』

「はい、おはよう。というか、またこれからも宜しく、だな。」

生徒たちは頷いた。

「持ち上がりで再び同じメンバーだ。まあ、それだけ団結力はあると思うし、いいスタートだと思う。・・・そこでなんだが、君たちについて、謝っておく。済まなかった。2年生の時は物凄い迷惑をかけてしまったな。」

「まったくうー、もういっかい言わせないでよ。全然気にしてませんって！」

「むしろ、あれがあったおかげで団結力が深まったわけだし♪」

「しかし、それでは私の気が済まないんだ。だから恩返しのためにお前たちにこの一年間、たくさんの思い出を作っていききたいと思う。いいか？」

『はいっ！！』

声を揃えて返事をした生徒たち。逞真は微笑んだ。

数日後の学活の時間・・・

「はい、それでは今日の学活は係り決めと学級目標について決めたいと思います。」

「ギター！」

「待ってましたっ☆」

盛り上がる一同。

「どうする？目標から決めちゃうか？」

「はい！そのほうがいいです。」

「そうか、なら委員長中心に決めてくれ。時間は10分間。」

生徒たちは話し合い始めた。

「どうする？」

「まず、どんな感じがいいかな？」

その姿を逞真は窓側に寄しかかりじっと見ていた。

「うーん・・・あ。」

賢吾けんこがポンと手を叩いた。

「この学級、34人だよね？」

「うん。」

「ねえはかせ君、成立するって英語でなんていうの？」

はかせ君は独自のメガネをくいつと上げ、言った。

「ズバリ、be made up of ですな。」

「なる。be って、未来形でも現在形でも過去形でもなるってことたる？よし！わかった！！」

賢吾は立ち上がった。

「んじゃ、賢吾。言ってみて。」

「ういっす☆え〜と、34 is made up of a teacher ってのはどう？」

逞真は思わず目を見張った。

「え、どうゆー意味？」

「34人は、一人の先生で成り立ってるってこと。その一人の先生は勿論・・・」

賢吾は逞真のほうを向いた。

「いいねっ！一人の先生で成り立ってる・・・ってことは先生とこちらが孤立しちゃだめで、34人が必ずいないとだめってことだよね？」

「そういうことっ！」

「みんなどう？」

生徒たちは拍手した。

「駿T、どうっすか！？」

逞真は沈黙していた。

「・・・駿T？」

「あ、ああすまん。いいんじゃないか？2年生のころの過ちを上手く目標に置き換えている。」

「ホント？やったぜ☆」

「この目標を忘れずに、これから頑張ってくれよ。」

『はいっ！！』

本当の所、逞真は予想外で何も言えなくなりそうだった。ふつうなら、一致団結だとかそういう目標が多いけど、3組らしさが出ていて、傑作だと思ったのだ。それに、本当に自分のことを許してくれているんだなと、感じたのだ。

「では次に係り決めに移る。黒板に書いていくから、やりたい係りの所に自分のプレート置いてくれ。」

逞真が書いた係りの横にどんどんプレートが置かさる。気づけばほぼ人数ぴったりになっていた。

「・・・驚いたな。一発で決まるとは。」

しかし、一か所だけ、残っているとところがあつた。生徒会本部役員だ。普通なら引き続き以前の役員がやるものだが、空いているのだ。はかせ君のプレートはある。・・・花帆^{かほ}だった。

「・・・花帆はやらないのか？」

花帆は頷いた。

「しかし、それではうまく係りが決まらないぞ。」

「花帆はやりません。絶対に、しません。」

花帆がこんなに物事を強く願うのはよっぽどのことだった。逞真は物思いに花帆を見詰めた。その時、チャイムが鳴り、学活は終了した。

「では挨拶省略して休み時間に入ってくれ。」

皆が立ち上がる中、逞真は花帆を人気のない廊下に呼び出した。

「・・・何故、やりたくないんだ？」

「やらなきゃだめですか？他の人に頼めませんか？」

「なにもそんなことは言っていない。だが、花帆は生徒会を楽しんでいたからこのまま続けるのかと思ったただけだ。」

「・・・勉強と、部活と、生徒会の両立が大変だったってこともあるんですけど・・・」

花帆はきゅっと拳を握った。

「両立が大変なんじゃなくて、部活に貢献しなきゃないんですっ！」

「部活に貢献？花帆は合唱部だな。室川先生が言ったのか？」

「違います。自分で決めました。」

「どうして貢献したいと思ったんだ？3年生になるからか？」

首を振る花帆。

「それも一理ありますけど、でも、波音が・・・」
「波音？」

「先生知ってます？波音、部長になったの。」

「ああ。」

「波音ひとりで大変だから親友の花帆が助けてあげないと思って。それに波音、家でも・・・っ！！」

「家・・・？」

花帆はハッとして口を噤ませた。

「なんでもないです。とにかくやりませんから。」

「わかった。3年生の他の皆にも協力するよう言ってみる。」

「ありがとうございます。」

花帆は教室に戻っていった。

・
逞真はこの時点で、なにか騒動が起きそうな予感がしていた・・・

第2話 駿河学級・再び（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第3話 シンボルフラッグ

「絵具、どこだっけ？」

「何色ー？」

「青、青！」

「はい」

ここは技術室。2年生数名が集まっている。

「えーと、設計図は・・・あ、やっぱりもっと濃い水色だよ。見た感じの方がいい。」

「さっすが美術部！こういうこと向いてるね！それに比べて俺たちは・・・」

「クラスのために学級旗作るってことで毎年やってて、今年はなんかめっちゃやる気になったから制作委員に立候補したけど、やっぱり才能とかあるのね。」

そう、この時期学級目標の入った学級旗を各クラスで作り、順位を争うのだ。

「ねえ、3組のヤツってどんな感じ？」

2組の制作委員がやってきた。

「最終的にはわかるよ。それまで秘密？」

「えー、なにさつまんねー！」

「よっし、だったらどのクラスも他のクラスに見せないでやってこ
うぜ！そのほうが面白味あるじゃん。」

「お、いいじゃん。」

「んじゃ、1組はこの場所でいいから2組は器具室。3組は機械室
ね。」

「わかった☆」

みんなそれぞれの場所に移って活動を始めた。

「でもさ、3組が勝つ自信、あるよね。」

「うん。2年生のころはイマイチで結局3位だったけど。でも今回
は自信あるよ！」

「だって、全員で考えたんだぜ？」

「そうそう。駿Tには内緒にしてこっそり放課後残って話し合った
けどね。だから駿Tビックリすんじゃない？」

「んあーっ！！楽しみになってきた！」

「だから早く作ろうぜ！」

筆を進める3組のメンバー。

「この星とかいいよね。」

「団結感があってね！」

・
・
・
・
・
・
・

「それでは、始めますか。」
「はい。」

ここは会議室。3年生の先生たちが集まっている。1組の梅木先生が立ち上がって仕切る。

「今回の会議は、5月の修学旅行についてです。目的地は昨年と同じですので、自由行動の場所を決定させ、それから詳しい内容に入っていくと思います。」

「去年はどこでしたっけ？」

「確か、歴史博物館や大通りの店とか自然的なところに行って、それぞれ体験学習ができる仕組みになっていたと思いますが。」

「そうでしたね。今年、どうします？」

「そもそも自主行動をさせるかどうかですね。それなりに費用と安全性も考えなければなりませんし、生徒たちができるかどうか・・・」

長テーブルに手を組み、逞真は意見を主張した。

「いえ、自主行動はさせるべきです。社会性を育むために毎年行っていることですし、3組の生徒はそれを楽しみに待っています。それなのに無くしてしまうと、そのほうが危ういかもれません。」

「そうですね。今年の3年生は責任感もありますし、大丈夫でしょう。」

「問題は場所ですね。」

少し沈黙が続き、ふと斉藤先生が呟いた。

「調べてみたのですが、今年の宿泊するホテルの近くには洞窟があったはずですよ。海にも面してますし、天気によっては美しく、いいんじゃないかと思います。自然に触れ合ういい機会ですので、まずここはどうですか？」

「いいですね。賛成です。」

「私ですよ。」

他の先生も賛成した。

「では一つの案はこれで。」

「はい。」

「あ、自然といって思い出したんですけどいいですか？」

「はい。なんでしょう駿河先生？」

「その地域といえば海岸線ということで普段私たちは川や山の中で暮らしていますからいい機会ですよ。それは斉藤先生もおっしゃっていました。その海岸線は一部サイクリングロードができていました。ですので、学年全体ではそこに行けばいいのではないかとどうでしょうか？」

「それは、自由行動の件について話し終えた後に会議しようかと思っていたことですが、駿河先生のキレる頭で早く決まってしまうね。」

会議室にちょっとした笑いが起きる。

「どうですか？」

全員の賛成。逞真は微笑を浮かべた。

「急にすみませんでしたね。では話に戻しましょう。」

「では、昨年と同様、歴史博物館と大通りは利用しましょうか。」

「はい。」

「では、それで一段落としましょう。次は……」

修学旅行についてだんだんと進んでいくのであった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「よし！上出来じゃね！？」

「4日間でこんな早くいくとは！」

「甲斐があったっつーか♪」

「ってか、すんげーよ俺らの！」

顔やジャージを絵具だらけにして、3組のメンバーは満足そうな顔をした。

「ねえ、早速駿Tに見せたくない？」

「そうねー。今日会議とか言ってたけど終わったかな？」

「終わったとしても部活行っちゃったとか？」

伊月が首を振る。

「ううん、それはないよ。女バス、休養日で明日まで休み。ほとんどの部員が制作委員に行っちゃって数人しか残ってなくてさ。意味ないからって休みにしたんだ。」

「そっか！なら会議終わってればイケるね♪」

「んじゃ、代表2人で職員室行こうぜ☆」

「よっしゃ！」

職員室・・・

「失礼します。あ、駿河先生！」

パソコンに向かう逞真が顔を上げた。

「おう、どうした？」

「ちょっと来てください！」

「は？お、おい！」

生徒たちは逞真の腕を引っ張って、2階から1階の技術室に向かった。

「まったく、一体なんだ？」

ガラッと扉を開けると、各クラスの制作委員がこちらを向いて”
うわー、3組もう終わったの！？”と嘆いていた。

「ああ、そうか。学級旗……。そういえば、全然話し合った形跡
はなかったが大丈夫だったのか？」

「当たり前じゃないっすか☆じゃないとわざわざ駿T呼びません
って！」

「？そうなのか。」

不思議そうに機械室に入ると3組の制作委員が手招きして笑顔を
見せた。

「待ってました駿T！見てください！！」

「あ、ああ。」

言われるがままにその大きな絵を見ると、逞真は思わず目を見開
いた。

その旗に描かれた絵は、逞真の想像を超えていた。

背景は群青色で神秘的なのに対し、その中で輝く星たちが明るか
った。しかもその星のなかには字が書かれており、それはそれぞれの
名前の頭文字だった。それを優しく抱えるかのように下のほうには
上手くデッサンされた手が書かれていた。

逞真はふと思って、途端にフツと笑った。確か、この手は美術部
の中でも上手いほうの李杏^{りあん}が逞真をモデルとして書きたいと言って

きたものを写した感じだった。すべてはこのためだったらしい。

一番上には目立つ感じに” 3 4 i s m a d e u p o f a t e a c h e r ” とバランスよく書かれていた。

念のため、訊いてみた。

「この手は、私なのか？」

「はい！んで、この星は私たち。わかりました？」

「まあ、頭文字が書かれていればそれはな。」

「俺たち、とうとう星に・・・」

「馬鹿は黙ってよくね？」

ベシッと頭を叩くいい音が鳴る。

「いてっ」

「芽依子、それ以上紘一郎を叩くと手の力だけ上がってしまうぞ。

男かお前は。」

「せんせ、そんな冗談ばっか言っていると、先生のこと叩いちゃうよん？」

「・・・やめておく。」

「そ。（ニヤリ）」

気を取り直して逞真は再び旗を見た。

（本当にいい出来だ。どうして、知らぬうちにここまでできるのだろうか？やはり、いい子たちの集まりだ。）

穏やかに微笑む逞真に生徒たちはニコツと笑った。

「どうですか？」

「いいぞ。傑作だ。これは1位を狙えるかもしれない。」

「聞いた？駿Tのお墨付きだよ！！」

「やったー☆」

「それはいいんだが……」

逞真は辺りを見渡し、苦笑した。

「この様をどうにかしないと、松田先生が困るぞ。」

「あゝ、そうだ！賢吾！あんたたくさんこぼしたでしょ！！」

「お、オレ！？」

そんな様子を見ながら、逞真は再び微笑んだ。最近、逞真の表情は豊かになりつつあるようだ。

結局、3組の学級旗は副担任の評価により、1位になった。

第3話 シンボルフラッグ（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第4話 修学旅行・前編★

「明日は修学旅行です。体に気を付けて、ゆっくり休んでおいってください。くれぐれも事故などを起こさないように。以上。」

「気を付けー、さいならー!!」
『さいならー!!』

ワイワイとはしゃいで帰っていく生徒たちを逞真は微笑んで見送った。

「とうとう修学旅行、か。」

そう呟いて物思いに窓の外を見詰めた。サッカーボールや野球ボールの飛ぶ空はまだ少し淡かった。

「ただいま。」

家に帰ると、穏やかな笑顔で逞真の妻・萌が迎えた。

「お帰りなさい、逞真。ごはんできてるよ。」

「ああ。すまない萌。」

逞真はぐったりとソファにもたれ込んで、ネクタイを緩めた。

「お疲れ様。」

「ありがとう・・・でも明日だ。もっと疲れるのは。」

「そうだね。修学旅行だっけ？」

「ああ。2泊3日。その間、ずっと家を留守にするが・・・いいのか？」

「え？」

逞真は心配そうに萌の膨らんだ腹をさすった。

「あと、2か月くらいだろう？体だって辛いはずなのに3日もいないと大変じゃないのか。」

「ふふっ、大丈夫よ。あなたが私と別れた時なんかつわり起こしても一人で頑張ってたんだもの。」

「・・・そうか。ごめんな、萌。本当はもっとお前といなくてはならないのに。」

「”教師という役職じゃなかったら”って？なあに？逞真らしくないじゃない。」

「そうだな。何でもないよ。」

逞真はそのまま萌の頭を自分の肩に埋めさせた。

「いよいよだゼ☆」

校舎前を走り回る男子たちに、会話で盛り上がる女子たち。

「ほらーっ、そろそろ出発式を始めるぞーっ!!」

梅木先生がそう叫ぶとスツと生徒たちは並んだ。

「つたく、はじめがついてるのはいいことなんだけど。」

逞真に振り向くと、

「楽しみなだけに、いい機会じゃないですか。」

と生徒たちをみて口角を上げていた。

「ですね。」

梅木先生も苦笑する。

「最近、いい笑顔してますね。」

突然の眩きに逞真は戸惑って

「・・・はあ。」

と、言うしかなかった。

バスに揺られて約5時間。最初の目的地に着いた。

そこは・・・・・・

「待ってましたっ！ゴットスターズランド♪」

「遊園地と言えばここだね。テレビのCMとかで何回も見てさ
〜！！」

「あの絶叫マシーンいいよね。すっげえ高いところから落下すんのや
ってみてえ〜！！」

「え〜、私そういうのやだ。」

生徒たちは大はしゃぎ。

「はい、それでは各自行動してください。迷惑を掛けないように、
それから事故を起こさないように。では、開始。」

梅木先生の言葉とともに、生徒たちは早速動き始めた。

逞真がやれやれと微笑を浮かべていると、3組の5人ほどに声を
掛けられた。

「駿T、一緒に行動してくれませんか？」

「あ、ああ。別に構わないが。」

「あつ、賢吾の班ズルい！うちらが頼もうと思ったのに！」
「へっ、早いもんがちーっ♪」

賢吾はべーっと舌を出した。

「賢吾。お前がガキか。」

そうツツコミながらもついていく逞真。

「お前たちは最初はどこに行くんだ？」

「お化け屋敷です。」

「・・・なに？それは少し順序が早すぎないか？」

「だって、すぐ混んじゃうじゃないですか。今空いてるし。・・・
あ、先生こわいのダメ系ですか？？」

逞真は苦笑いした。

「別に。そう見下してくるならば、行ってやるよ。」

「よっし！駿Tものったところでいっちょ行やすか♪」

その班は空いているお化け屋敷に入った。

中は、外の蒸し暑さが吹っ飛ぶ感じに冷ややかで、不気味なライトで照らしだされていた。

「な・・・なんかこわくね？」

「まだ何も出てきてないのにー。」

恐る恐る歩く生徒に比べて逞真はズンズンと歩いていく。

「せ、先生、歩くの早いよお・・・」

逞真が呆れた表情で振り向いた。すると、生徒たちの顔は青ざめる。

「駿・・・T・・・？」

「？どうかしたか。」

「うし・・・後ろ・・・後ろ後ろ！！」

「はあ？後ろがどうした？」

「あゝ！！振り向かないで！」

「なんだ？言葉になっていない。一体なんだっていうん」

逞真が向きなおした瞬間、ゾンビが襲いかかってきた。

「ダァーッ！！」

「ギ、ギャァー！！！！！！！！」

その班は男子だけだったのだが、流石に全員逞真の後ろに隠れてしまった。

一方、逞真はそのゾンビをまじまじと見詰めこう言った。

「・・・よく細工されている。」

「は。」

「見てみる。人形なのにここまで動いて。まるで人間のようだ。」
「人形・・・？」

「やはり、お化け屋敷にまで最先端技術が備わってきているのか。」

生徒たちは啞然と突っ立ってるしかない。

「もしかして、駿Tって・・・感じない人？」

「まあ、こういう反応しかできなかったのは事実だ。」

班の一員の翔はポンと逞真の肩を叩いた。

「先生、何も言わないでいいからゴールするまで俺たちの盾になつて。」

「・・・まあいいだろう。」

「駿T誘つといてよかったかもね。」

「ホントさ。」

そのあとも・・・

「ギャツ、夜の病院だ！」

「見ろお。中にフランス人形が・・・こちらを睨んで・・・！」

「呪いだあああ！！！」

「・・・あんな人形どこに売っているんだろうな。」

「先生・・・」

またまた・・・

「うわっ、上からコンニャク!!」

「冷てー!」

「・・・どこから出てるんだろうな。暗いからわからないが、かなり細い糸で繋がっているぞ。」

「先生、黙っとうるかb」

「緊張失せちゃう!!」

「ってかどんだけ天然なんだよ!それとも計算の上でボケてるんすか!?!」

「・・・なに馬鹿なことを言っているんだ?観点変えてみる。あの意味面白いから。」

「いや、いいです。まだこの楽しみ方したいんで・・・」

「どんどん進んでいく逞真を”流石だ・・・”と見つめるしかない生徒だった・・・」

お化け屋敷を出て、次に絶叫マシンに向かった。運よくあまり並んでなくてすぐにできた。

「先生はー?」

「私はいいいからお前たちで乗れ。」

「わかりましたー♪うわっ」

物凄いスピードで上に上がっていく。その姿を自分のデジカメで撮る。

逞真はしみじみ思った。

（今、もし去年の状況だったらこんなに穏やかな気持ちで充実していなかっただろうな。）

生徒たちが上っていき、落ちてくる空は、やはり淡かった。

ホテルでの1日目の夜のこと……

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

「先生たちあっち行った。」

「他の班のやつも誘ったから、もうすぐ来るさ。」

……

「やつほゝまだやってなかったん。」

「お前ら待ってたんだけど！んじゃ始めるか！！」

「やっぱやめとこうぜ。こんな子供っぽいこと……」

丈がポツリと言うと、賢吾が思いっきり枕を投げた。

「何言ってるんだ丈！！これ定番じゃん！！こんな楽しいこと今やんないでどーすんだっ！！」

その言葉から一斉に枕投げが始まった。

はかせ君は読書に夢中になりながら枕をかわしていった。

バシッ

バシィッ

ドカツ

「ふうーっ！やっぱスッキリすんねー！！」

「6年生の時は結構真面目に守ってたからなんか解放されたって感じ♪」

「なんでやっちゃ駄目なんかね枕投げ。」

案の定、すぐに逞真がやってきた。

「いい加減にしろ！ドタバタドタバタうるせえんだよ！！」

「ゲッ、駿T・・・」

「お前たちはガキか。楽しいのはわかるが他の所にも迷惑がかかるってことが理解してないみたいだな！？」

「い、いや・・・定番じゃないっすか☆」

「ああん？」

「勝！いま余計なこと言うと・・・」
「あ。」

逞真は見る見るうちに震えて、額に血管を浮かばせた。

「今すぐ片付けろ！そして、自分の部屋に戻りなさい！！」
「は、はいー！！！！」

生徒たちは怒られながらも笑いを堪えるのに必死だった。

逞真は見回りとして他の部屋も覗いていった。

ガチャ

ドアを開けると、布団が5つほど並んでいた。中は暗くて皆眠っているようだった。

だが、布団のなかで何をやっているのかはわからない。だから、中に入った。

そつと奥に進んでいき、ゆっくり布団に触れる。すると、中がモゾ・・・と動き、バツと顔を出す。

「ワッ！なんだ・・・駿Tか・・・」

「ってか駿T！！夜な夜な女子の寝る部屋に入り込んで、私たちを襲う気ですか！！」

「いや、そういうつもりはないのだが・・・。一応見回りしているから確かめようと思っただけだ。」

「んもー、先生まだ若いんだしさ。また誤解されるって！」

「はは。面目ない。・・・何もしていないな。合格。」

そう言いながら上から見詰めてくる逞真がなにか男っぽくて、女子たちは顔を赤くして布団をかぶった。

「も！こちら何もしないで寝るので早く行ってください！！」

「わかったわかった。ゆっくり寝ろよ。おやすみ。」

「おやすみなさい！」

逞真はその部屋を出て、隣の部屋に足を踏み入れた。

「・・・おい。」

さっきとは違って電気がついていている。

「あ、駿T。こんばんワニ☆」

「何だお前。それより消灯時間はとくに過ぎているぞ。何をしている。」

「いや。ちょっと先生についての噂話してて。」

「噂話？また変な噂ではないだろうな？」

「逆ですって！メツチャイイ噂。ってか謎になってるんですよ。」

「そう言えば、駿Tの謎とか話してなんですよ。ちょっと付き合ってくださいませんか？」

「・・・なんだ？」

逞真は小さく溜息を吐いて輪に混じり込んだ。

「あの！先生って高校時代バスケのエースだったって聞いたんですけど、本当ですか!？」

そういえば、この班は全員男子バスケ部だった。逞真は苦笑した。

「ああ。本当だ。」

「マジっすか!？もっと詳しく!」

「はあ……。これ聴いたら寝ろよ。必ず。」

「はぁい。」

逞真は口を開いた。

「バスケは中2にハマって、約1年間やったんだが、それだけでは満足できなくてな。高校でもバスケ部に入ったんだ。」

「ほお。」

「しかし、私は未熟でな。未熟と言うよりは体力不足だった。筋肉が付くどころかどんどん痩せていった。どうしていいかわからなくて、凄く悩んだが、お前たちも知っているように私は頑固だろう。それに見かけによらず負けず嫌いだ。だから我武者羅にプレイをした。すると何故か成績が上がっていった。結局監督にも選ばれるようになった。」

「スゲーっ!」

「お前たちは動きは素早いが、リバウンドがイマイチだな。ならば、負けず嫌いになってどうしてもボールと取るんだっていう勢いでやってみろ。」

「はい!」

「あの、なんでそのまま選手になんなかったんですか?」

逞真はフツと息をついて立ち上がった。

「バスケにハマる前から教員になりたかったからだよ。中学の教師でも顧問になるっていう選択もあったからね。」

「なる・・・。」

「お前たちも頑張れ。今は弱いかもしれないが、必ず強くなれるぞ。さっきも言ったようにお前たちは動きが素早いから。」

「はい！ありがとうございます！！」

「流石。俺らのことよく見てる・・・。」

逞真は微笑んで電気を消した。

「早く寝ろ。おやすみ。」

「おやすみです。」

逞真は部屋を出て、ホッと溜息を吐いた。

（明日は、一体どんなことが起きるんだろうか？）

そんなことを考えながら逞真は自分の寝る部屋に戻っていった。

第4話 修学旅行・前編★(後書き)

中学生の楽しみの一つですね！修学旅行♪
次回は中編です☆

第5話 修学旅行・中編★

修学旅行2日目。

この日は朝から学年全体で海岸沿いに向かった。

ホテルからバスで15分足らず。すると、綺麗で美しい海が見えてきた。

「うおーっ、海じゃん！ 久しぶりだゼイ☆」

「私、去年行ったさ。」

「貴方を追って修学旅行♪喜びの日本海♪」

「替え歌作るな〜!!」

そんな姿を逞真は楽しそうに見詰めた。

「はい、それではこれから海岸沿いをサイクリングロードを通して渡っていききたいと思います。5分ほど歩いていくとレンタルバイクがあるので皆さんでそれに乗っていきましょう。」
『ハイ!!』

生徒たちはそれぞれ班ごとで歩き出した。地図を見て各自で場所を探すのだ。

「よし、俺らこっち行こうぜ☆」

「え、でもみんな違う方向……」

「いいんだっ! 冒険しようぜ、楽しいじゃん!!」

「わかった!! 冒険心だけで進むぞ!!」

みたいな班。真面目に地図通りに進む班。それぞれ楽しそうだった。

一方逞真は目的地を先回りして生徒たちを待っていた。

10分ほどして最初の班が到着した。1組の班だ。

「あーっ駿Tだ。ただいま?」

「……お帰りなさい。」

「きゃー!! 先生可愛い!!」

逞真は苦笑しながら名簿に印をつけた。

「先生、この後は何してたらいいんですか?」

「ああ、あつちでレンタルする自転車を選ぶんだが、まだ少し早いからそこで待っていてくれ。案内する。」

逞真は建物の中に案内した。

「中は土産とかあるから買ってもいいぞ。」
「はい。」

外に戻ろうとドアに振り向くと、その時ある人が目に留まった。

「おとう、コレ買って。」
「んー？」

逞真は目を見張った。

「お、お前は・・・！」

そちらも逞真に気づいて振り向いた。案の定驚いている。

「達之介！？」「駿！？」

ほぼ同時に叫ぶ。

「なにやってんだオメエ。」

「そっちこそ。なんだその子供は。」
「俺のガキだよ。ほら、賢志郎けんしろう挨拶は？」

「おはようございます。真田賢志郎です。よろしくです！」

「ほう・・・礼儀正しいんだな。賢志郎か。親子そろって凄い名前だよ。」

「だろ。」

「歳は？」

「今年で4歳だ。」

「つまり、前に再会した時はもう結婚していて子供もできていたと。」

「そういうこったなw」

「ああそう。」

逞真は呆れたように達之介を見る。

「おとう、この人だれ？」

「あー、おとうのむかし友達だよ。駿ってんだ。」

「そっか。おとうがお世話になりました。」

賢志郎はペコツと頭を下げた。逞真は苦笑する。

「いい子だな、お前の息子。」

「い、いや・・・そこ褒めるとこじゃ・・・。コラ賢志郎！余計なことすんじゃないよ。」

「だってえ。」

「達之介は旅行か？」

「そ。警察庁に休暇もらえてさ。チビと二人で来た。」

「そうなのか。幸せそうじゃないか。」

「うん。現にそうだ。」

微笑んだその時生徒が顔をぬっと覗かせる。

「駿Tー？なにやってるんですかい？？」

「お、お前たち・・・」

「結構な人がもう到着してるよ。」

「ああ、済まない。今行く。」

達之介はプツと笑った。

「そっか。駿中学の先生だっけ。ってことは修学旅行とか？」

「うん。3年生を受け持っていてな。」

「お前こそ幸せそうじゃん。早く行ってやれよ。」

「ああ・・・あ。」

逞真は思い出したように達之介に耳打ちした。

「俺、萌と結婚したよ。今妊娠中だ。」

「マジか！そりゃおめでとうだな！！」

「ありがとう。」

「これからも幸せに生きろよ。」

達之介が逞真の背中をバシッと叩くと

「痛いって・・・お前もな。」

と逞真も微笑んだ。

そして、生徒たちとともに外に向かった。

サイクリングロードは自然保護地域に登録されていて、花々があちらこちらに咲いていた。

「涼しいー！！」

「花は綺麗だし！！」

「しかもほら、あっちには海が見えるよ！！」

「あ、例の喜びの日本海？」

「そ！あれウケるよなww」

そして最終的についたのは砂浜だった。

「ここはわかるだろうが陸の端だ。内陸に住んでいる私たちにとってある意味珍しいことだな。」

「はい！」

「ズバリ先生、一つ言っていていいですか？」

「ああ。なんだ？」

「この場所は昔、湖だったそうですが、陸が崩れて海と繋がったんですよね？」

「よく知ってるな、はかせ君。」

「流石☆」

はかせ君はメガネをクイツと上げてフツと笑った。

「少し、調べたものですから。」

「そう言う関心はいいことだぞ。そういえば、私の子供のころはまだ湖だったが、何も関心などなかったな。」

不意に風が吹き、海の香りが鼻についた。

2日目の夜のこと。

3組の男子たちのある班は、ある作戦を練っていた。

「なあ、こういうの難しそうじゃね？」

「どこで見つけた!？」

「塾のハイレベル問題。入試通用だよ！」

「こりゃいいや! ヒヒヒ・・・」

「・・・なにしてんの？」

同じ班の元喜^{げんき}がトイレから帰ってきた。

「あつ元喜！アンタも手伝って！」

「な〜にをう？」

「この看板作って！文字はプリントしてあるから。」

「・・・”ドッキリ大成功！”？誰にドッキリすんの？」

「駿Tだよ駿T！寝起きドッキリ！！」

「夜、寝てる間に忍び込んで、多分すぐ起きると思うからその時にこの難問を出すんだ！」

「なになに？図形みたいだけど、凄く難しいね。なにこれ。」

「入試レベル！Aの長さBの長さCの面積を求めるんだ。これを寝起きでどれだけの速さで解けるか！面白そうじゃね！？」

「確かに。怒られそうだけど。」

「いいじゃん。な？早く作って！」

「ちなみに答えは？」

「えっと、回答によるとAは42、Bは62、Cは868だって。ホントだよ。」

「なんか楽しみなな。」

「んじゃ作業に戻ろうぜ！」

「でさあ、その例のホテルで起こったんだけど……」

ここは別の部屋。波音、花帆、美悠、妃那、実留が集まって何やら暗い部屋で話をしている。

「Aさん（男性）が8時から9時の時間帯にトイレに行ったんだって。そしたら……青ざめた顔した髪の長い女の人が見えちゃったんだって！」

「いや……」

「それで？」

「Aさんはただなんで女性が男子トイレにいるのかなと思っただけでそのまま通り過ぎただけで、しばらくして、温泉に向かおうとしたときにまたその人を見たんだった。何か探してるみたいでAさんがどうしましたって訊いたら、その女の人、こう言っただって……」「私の足知らない？」って。よく見るとその人、足が……足がなかったの……」

「ぎゃー!!」

「って、実留のお姉ちゃんの友達の話が言ってたんだって。」

「なんだ、結構遠い関係じゃん。」

「ねえ……なんか寒くない？それになんか気持ち悪い……」

「ははww波音は弱いからなあ！」

花帆が茶化すように言いながら立ち上がる。

「ほら、駿Tのそこ行こ。体調悪いなら。」

「ありがと……」

「なら私もご一緒するよ。」

ってことでこの班全員で逞真の所に行くことにした。

ドアを開けると斉藤先生を見かけた。

「斉藤先生！駿Tどこ知りません？」

「ああ、駿河先生なら先生方のいる部屋で留守番してるよ。」

「へー、暇な仕事ですね。」

「コラ、毒舌平原。そんなことねえって。ほら、あっちの205号室だから。」

「ありがとうございまーす☆」

言われるがままに205号室へ。

コンコン

ノックをしても返事がない。

「あれ、まさかの留守??」

「でも・・・」

ガチャ

「鍵開いてるけど。」

「あ。」

「もう、入っちゃおうよ！波音だってほら、危険な状態。」

「うう・・・」

彼女たちはその部屋に入った。

「失礼します・・・」

中ではベッドの上で規則正しい寝息が聞こえた。

「駿・・・T・・・ですか・・・？」

「みたいだね。」

「・・・」

逞真は布団も掛けずに寝そべってそのまま寝入ってしまったらしい。

「うわ、なんていい寝顔。」

「アンタ変態か！」

「だってえ。でもさ、こういう人って寝顔は優しげだていうけどさ、駿Tの場合、なんか違うよね。」

「確かに。あの無愛想が目を閉じた感じ。そのままだわ。」

「・・・起こしちゃう？」

「いいよいいよ！こんな気持ちよく寝てるとこ起こすまで私体調崩してないから。」

「そっか。」

「んじゃ、戻るか。」

「失礼しました・・・」

静かにドアを閉めて、溜息を吐く。

「どうしたの？」

翔が現れた。

「あ、実留の彼氏。」

「本人の前で言うな！」

「で、どうした。」

「波音が体調崩したから駿Tのところこうとしたけど、寝てたみたいよ。」

「マジ！？駿T寝てたの！？」

「うん。そんなに驚くこと？」

「いや、これにはわけがあって……。勝！」

「ん、なに。」

「駿T寝てたってよ！今がチャンスじゃね？」

「おお！やるっきゃないね！！」

「ちよっと班の奴連れてこようぜ。」

「待ってて！！」

勝が部屋に戻る。

「・・・なにがどうした。」

「あ、説明するよ。」

翔は寝起きドッキリについて説明した。

「何それ！？バツカバカしい！」

「そんなことしなくても駿Tは頭いいでしょ。」

「でも誰かに寝起きドッキリしてみたかったんだよ。そしたらあの人しか浮かばなくて。」

「フフ？寝起きドッキリ♪」

「花帆は幸せそうなこと。」

「面白そうじゃん！」

「もう、波音が体調不良だってこと忘れてるでしょ……」

そして諸君が集まり、205号室の中へ。

そつとベッドに近づくと確かに逞真は寝ていた。

「こりゃいいや。誰かデジカメもってない？」

「俺持ってる♪」

「デカした!!」

ニヤケながら男子たちはデジカメのシャッターを押す。

カシャッ

「あゝ。」

しくったことは、フラッシュ機能がオンになっていたこと。その光とともに、逞真の体は動いた。

「う……ん……」

「ヤベエ・・・」

「でも、後でいい報告できるな」駿Tの寝顔・・・
「ちょっと静かにしてッて!!」

「ん・・・なんでいるのお前。」

「ギクッ!!!!!!!!!!」

「起きちゃった!!」

逞真は目をこすりながら、生徒たちを見やる。

「こうなったらやるっきゃねェ! 駿T、この問題解いて!!」

「・・・は・・・?」

「いいから解いて!」

「・・・?」

逞真は何が何だかわからないまま、その問題集を見詰め、目を細めた。

そして溜息を吐いてじつくりと問題集を眺めた。

沈黙が続く。逞真は胸のポケットからペンを出し、素早く計算式を解いた。

「は・・・速・・・」

「ってかほぼ暗算して本当に必要な式しか書いてない。」

「・・・出た。A $\parallel$ 42 B $\parallel$ 62 C $\parallel$ 868。・・・合っているか?」

「まるっきり正解・・・。何秒!?」

「1分24秒・・・」

「流石駿T! 凄いよ!!」

逞真は首をゴキゴキ鳴らし、面倒くさそうに彼らを睨んだ。

「一体なんだっていうんだよ。」

「あ、忘れてた! 元喜!!」

「うい。」

看板を出す。

「寝起きドツキリ大成功!!」

「イエーイ☆」

「・・・ドツキリだと?」

「そ! 寝起きで何秒で難問を解けるか!」

「そんなもの・・・たかが入試レベルの問題だろう? 教師をナメるな。」

「スンマセンでした・・・」

「悪いが、私は寝起きが悪いたちなんだ。気分が優れていない。」

逞真はTシャツの袖を肩まで捲り上げ、再び目をこすった。生徒たちは”色気ヤバ・・・”と思った。

「だが起こしてくれて感謝する。用はこれだけか?」

「あ、いえ! 波音がですね! 怪談話してて気分悪くなりました!」

逞真は苦笑い。

「まったく、なにしてるんだ。気分悪くなるまでしたら駄目だろうが。」

「でも、そこまでしてないですよ。一個話ただけでこんな感じ。」

「ごめんなさい・・・」

「靈感感じる奴？お前。」

「わかりません。でも、こういう話になるとすぐこうなるんです。」

「そうか。待っている。」

逞真は立ち上がり、傍にある自分のジャージを波音に羽織らせた。

「これでも着てなさい。」

「ありがとうございます。」

「いいなー、波音。」

「・・・駿河先生の匂いがする。」

「お前！なにエロいこと言ってるんだよ！NGワードだろ！！」

「え？そうかな？思ったこと言っただけなんだけど・・・」

逞真はフツと笑った。

「むやみに修学旅行先で怪談話をすると、危ないぞ。」

「え？なんで？？」

「こういうところにはやたらといえるらしいぞ霊が。ここはどうかかわからないがな。」

「マジっすか！？」

「どうしよ・・・呼び寄せちゃったかな？」

「イヤー！！！！」

その時、ドアがバンと開く。

「先生助けて！」

賢吾たちであった。

「なんだ？一体どうした。」

「さっき・・・変な人影が・・・」

「え！？」

「まさ、まさまさまさか・・・幽霊！？」

「ちよっと待て。落ち着け賢吾、順序を説明しなさい。」

賢吾は息を切らせて、その場にかけて。

「さっき、俺たちでトイレ行ったんすよ。そしたら黒い人影がいて、しかもこっち睨んでたんす。あと、足があったようななかったような・・・だから不安に思ってた！」

「そ、それって・・・」

「幽霊だよ！あれ絶対幽霊だって！」

「なぜそこまで言い切れる？」

「だって、私たち怪談話したって言ったじゃないですか。その内容が、ほぼそれだったんです！」

「もしかして・・・その噂のホテルがここだったりして！」

「落ち着けて。そんなもの偶然かもしれない。賢吾、それはまだ男子トイレにいるのか？」

「いや、気付けばいなかった・・・」

「確かめてみないとわからないしな。行ってみるか。」

逞真が立ち上がると皆もスタンバっていた。

「なんだ、お前たちも行くのか？波音が体調崩しているのに。」

「あ、私は部屋で休んでるので大丈夫です。」

「だって！早く行こう！！」

逞真は少々呆れながらも、いくことにした。

「話でいくと、温泉に向かう途中に幽霊はいるはずなんだよ。」

温泉のほうに向かうと、弱弱しい声が聞こえた。

「ない・・・ない・・・。」

生徒たちは不気味に思って逞真の背後に隠れる。

「な、なに!？」

「少しは落ち着いたらどうだ？」

「先生のほうが尋常じゃないですって!」

「誰? 暗くてなんもわかんない・・・。」

近づくにつれて、声は大きくなる。

「ない・・・ない・・・!」

「何がないの!？」

妃那が言うと、その声は反応したかのように言った。

「あしが・・・あしがいないんだよ・・・あし知らない?」

生徒たちは青ざめて逞真のTシャツをグッと掴んだ。

「おい、服が伸びるだろう。」

「だって、今の聞いたでしょ？ 足がないって言ったよ！」

「やっぱり幽霊!？」

その霊(?)はまだ言い続ける。

「ない・・・僕のあしが・・・」

逞真は眉間にしわを寄せた。

”僕”・・・」

そして、自分のライトを出してそこを照らした。

「・・・あ。」

「・・・皆見てみる。幽霊ではないぞ。」

そこで照らし出されたのは・・・

「はやて颯天・・・！」

3組の男子・かいだはやて海田颯天だった。

「颯天はここで何してるんだ？」

「あ、駿Tだったんだ。びっくりした。みんなもどうしたの？」

「それはこっちの台詞だよ！こんなところでなにしてるんだよ！」

「だーかーらー、僕のあしがないんだって。」

「足ならあるじゃん。」

「こっちの足じゃなくて植物の葦。」

「??:」

「お前たちもサイクリングロードで見ただろう。植物を。その中に葦と言う植物があったんだ。」

「そう。んで、体験場所で葦の赤ちゃんもらったからさ、大事にとつといたのにどっかいつちゃって。知らない?」

「知るかよ!!」

「うわ、ひどいなあ。そこまで言わなくてもいいのに。」

「じゃあさ、トイレにいたのも颯天なの?」

「うん。なんども賢吾を呼んだのに返事くれないから睨んだの。」

「全く! お前童顔だし声変わりしてないから女だと思ったじゃん!」
「!」

逞真は溜息を吐いた。

「やはりむやみに怪談話をするものではないな・・・。」

P.
S

颯天の葦は、荷物の中に、それこそ奥のほうで大事に大事に残っていたらしいです。

また、生徒が撮った逞真の寝顔写真は一部の生徒や教師の中で物凄く盛り上がり、一躍有名になりましたとさ。

チャンチャン♪

第5話 修学旅行・中編★（後書き）

次回でいよいよ後編です！

次回もよろしくお願いします☆

第6話 修学旅行・後編★

3日目のこの日。

天気は曇りだった。昨日まで晴れていたのになんでもかと思えば、台風が接近してるといふ。

緊急で教師の間で会議が始まった。

「どうします？今日は自主研修の予定でしたが。」

「博物館などに行くのはともかく、山登りや洞窟渡りはよく天気が生じますからね。」

「しかし……」

逞真は納得できなかった。せっかくの生徒たちの思い出をこんなことで台無しにさせたくないかったのだ。

「外はまだ曇りですよ。予報ではこれから雨が降るということもありますし。……私は実行させたいと思います。例えば天気が荒れたとしても引き返せばいいことです。こんなことで生徒たちの

思い出を台無しにしないけません。責任は私が取ります。いかがでしょう?」

他の先生方も頷いた。

「いいでしょう。その通りですね。再開しましょう。」

「会議まだかなー?」

「ってかきつと無しでしょ? 行きたかったなあ、洞窟。」

「私も歴女なのに・・・」

その時、先生方がやってきた。

「自主研修は実行します。しかし、天気が荒れた場合、中止にします。」

梅木先生の言葉に生徒たちは心から喜んだ。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「風が強くなってきたが、大丈夫か？」

「はい！」

「自然の中では当たり前のことなんですよね？ ヘッチャラです！」

「これも洞窟に行くまでの辛抱だと思えば！」

生徒たちのポジティブ発言に微笑む逞真。

「あと少しだからな。」

向かい風をゆっくり進んでいく。

そして、なんとかついた洞窟。その暗い中に入っていた。

「足元に気をつけろよ。」

頭上はコウモリの鳴き声。少々怖がりながら逞真の後に続く生徒。

しばらく歩くと、明るい光の差し込む神秘的な場所に到着した。

「うわぁ・・・」

壁は氷柱つららのように鋭くとがっていたり、歪に曲がっていたり、神秘ひそなものだった。青白く差し込む光がイメージを膨らませてくれ、その中でポツリと小川が流れていた。

「ここはパワースポットとしても有名な場所だ。その小川は海から流れ出た水が浄水され、流れてできている。飲んでも害はないし、むしろ美味しいそうだから、飲んでみてくれ。」

言われるがままに口に注ぐ生徒たち。

「ホントだ！美味しい！！」

「なんか元気もらえねえ？」

「確かに！」

「生き返るうゝ」

不意に、逞真の携帯が振動する。逞真は洞窟の外に出て、耳に傾けた。外はさっきよりも風が酷く、雨が降っていた。

「はい。」

『駿河先生、僕です、斉藤です。』

「斉藤先生。どうしました？」

『天气が荒れてきましたよね。』

「はい。さっきよりも風が強いし……」

その時、大きな雷が鳴って、一気に土砂降りになる。

「今、物凄い雷が鳴って、大荒れになってきました。」

『こっちもです。山の袖のほうにいますので、いまから引き返そうと思ってるんですけど、駿河先生はどうします？』

「洞窟なのでここで待機することもできますが、これ以上止まない場合、やむを得ず引き返そうと思います。斉藤先生のほうは山なので、土砂崩れなどに気を付けてください。」

『そちらも、海に近いので気を付けてくださいね！では。』

通話が絶え、逞真は携帯を閉じた。

「この天気、どうするかな……」

一方生徒たちは……

「駿T遅いね。」

「どうしたんだろ。」

「ねえ見て。外が凄い天気みたいだよ。」

「本当だ。音もスゲェな。コレ津波の音だろ？」

そののん気に話していると、急に突風が洞窟内を襲う。

「うわっ！ 凄い風！！」

「これ、外の強い風が通ってきたんだよ。」

「か、体ごと飛ばされそ……ウワッ！！」

生徒たちは一番強い風に吹き飛ばされた。

壁に叩きつけられる者、必死に耐える者、色々だが、奥のほうに

飛ばされると暗く、何も見えなかった。

「あれ？何も見えない……。皆ー！？」

「大丈夫ー！？どこにいんの？」

「わかんない！」

波音はきよろきよろ辺りを見回してみる。しかしやはり何も見えなかった。

その時、再び風が吹く。障害物も何もなかったため、すんなり波音は飛ばされてしまった。

「キャッ！！」

すぐ後ろは小川だった。波音はその中に落ちてしまった。

バシャン！

その小川は意外に深く、波音の身長はすぐに埋まってしまった。シヨックで沈んでいく。

「！？波音！？おい、今落ちた音しなかった！？」

「うん。今確かにバシャンって。」

「波音ー！いたら返事して！！」

返事はない。

「どうしよう！落ちたかもしれない！誰かライト持ってない！？」

「あ、あたし持ってる!!」

懐中電灯のスイッチを押すが、明るくならない。

「ま、まさかの手動操作の充電式!？」

「ウソーン!! こんな時に!!」

レバーを回し始める生徒。

「この間に誰か駿T呼んできて!」

「俺呼んでくる!!」

「近くにいなかったら、違う大人でもいいからさ!!」

「わかった!!」

そう言いながら洞窟の外へ走る大晟。

「まったく、駿Tどこだよ! この天気で何にも見えやしねエ・・・」

舌打ちしながら辺りを見渡すと、そこに人影が向こうからやってきた。

「・・・ん?」

その人は、良く見えないが銀色の獣の毛皮でできたパーカーを羽織っており、その中の服は襟元がはだけている黒いYシャツで首にはごつい造りをしたチャームネックレスを数個つけていた。見た目はドラマで出てくるヤクザのようで、しかし表情は喧嘩を売っているようではなく、どちらかと言えば冷ややかで冷酷な眼差しをしていた。

「あ・・・あの！」

大晟はチャンスだ！と思い声を掛けた。

その男は立ち止まる。大晟は足がすくむかと思った。割と雰囲気
の怖いほうの逞真よりもはるかに恐ろしかったからだ。

その男は巻き毛だったのだろうが雨で乱れており、後ろ髪は首元
まで伸びていた。

「・・・なにか用か？」

「えっとお・・・あ！助けてください！僕のクラスメイトが洞窟
の中の小川におぼれてしまっ！」

男は顔を歪ませたが、黙って大晟についていった。

「あ！大晟！！」

「駿Tみっかった!？」

「ううん、でも大人の人見つけたから助けてもらおうかと思って！」

大晟の背後にいる男に生徒全員がビビった。

男は洞窟の奥のほうを見やった。

「……暗いな。」

生徒たちはギクシャクしながらさっきの充電し終わったライトを渡した。

男はライトを点け、小川の中に向けた。

「……確かに人がいるけど、あれなのか。」

低く、暗い声に必死に答える生徒たち。

「そうです！あれです！！」

男は無言でパーカーを肩から外した。ふと紘一郎が呟く。

「なんか雰囲気駿河先生みたいじゃね。」

「バカ！今それは関係ないじゃん！！」

男はピクリと反応して振り向いた。

「……駿河？」

「あっえっとその……なんでもありませんからっ！」

「……駿河ってお前たちの担任？」

「は、はい……」

男は渋い顔をする。

「駿河……なんていうんだ？ 下の名前。」

顔を青ざめる生徒たち。

（きっと、担任の本名聞いてお偉いさんに訴えるつもりだよおお
！！）

誰もがそう思ったが、答えなければそれはそれで危ないと思い、
答えた。

「駿河逞真です……。」

「20代？」

「は……い。」

男は驚きを含んだ嘲笑を浮かべた。かと思うと小川に飛び込んだ。

間もなく、波音を抱いた男が顔を出した。

「あ！ 波音！！」

「よかった！！」

「息があるか確かめたほうがいい。」

「ありがとうございます！！」

地面に置かれた波音に近づく生徒たち。男は一言吐き捨てるように言った。

「おい、てめえら！」

「はっ、はい!？」

おそらく、誰もが足が竦んだだろう。まるで本物のヤクザだ。

「駿河逞真の携帯番号知ってる奴。」

「あ、確か栞に……」

と、栞をだし、逞真の携帯番号の載ったページを開いて渡す。男はそれを受け取り、洞窟の袖のほうに出ていった。

男は自分の携帯電話をだし、ボタンを押した。そして耳に傾ける。

大雨の中、ゆっくりと進む逞真のもとに携帯電話が振動した。

「はい。」

『逞。』

「・・・・・・は？」

思わず聞き返す逞真に対して相手側はフツという声を漏らした。

『すぐに生徒たちのいる洞窟に戻ったほうがいい。いいか、俺は伝えたからな。聞き返しは効かねえ。』

「ちょ、ちょっと待ってください。どちら様で――」

プツッ

電話は絶えた。

逞真は妙に思い、携帯を見た。知らない電話番号。しかし口調には覚えがある気がした。

（まさか・・・・・・な。）

逞真は足取りを早く進めて洞窟に向かった。

（生徒たちに何かあったのか・・・・・・？まさかこの天気が生じて・・・・・・）

不安が心を埋めていく。それとともに足取りは早くなっていった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

息を切らして洞窟に戻ると、驚くべき光景に逞真は目を見開いた。

生徒たちを囲んでいるのは倒れた波音。そして、その胸を力強く押すのは若い男だった。

「駿T・・・！」

「遅いよー！！」

「済まない。それよりもこれは・・・一体どうしたんだ？」

「そ、それがぁ・・・」

「クソッ、息が戻らないー！！」

遮るように男が声を荒がした。

「そんな・・・波音・・・！！」

「死なないで！」

生徒たちも叫び始める。

「チ・・・・・・・・」

男は血が騒いだ獣のような瞳をして乱暴に波音の口を塞いだ。

「・・・・・・・・っ」

逞真はやり切れない気持ちだった。例え人工呼吸だとしても生徒が見知らぬ男に口付けされていると思うと胸が痛んだ。

「っゲホッ！ゴホッ！！」

その矢先、波音は水を吐き、息を吹き返した。

「はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・私・・・・・・・・私・・・・・・・・！」

「波音く！！！！」

女子たちは波音に抱き着いて、男子たちも安堵したように笑った。

男は口元を拭って逞真に振り向いた。

「生徒は助かったぞ。駿河逞真。」

そしてそばにあるパーカーを肩にかけ直し、逞真の脇を通り過ぎた。

（このまま帰すわけにはいかない・・・・）

逞真は頑固精神が働き、悔しそうな顔を露わにし、男の肩を掴んだ。

「ま、待て！」

男は敏感に振り向き、その手を乱暴に振りほどいた。流石の逞真も少しはビビる。男は逞真のことを舐めるように睨んでいたのだ。

「・・・いえ、待ってください。貴方は誰ですか？連絡をくださったのも恐らく、貴方なのでしょう？」

男はニヤリと笑って言った。

「Wolf in river. これで答えになってるはずだ。そうだろう？」

耳元で

「またな、逞。」

と小さく呟き、逞真の肩に手を乗せ、洞窟を後にした。

逞真はずっと沈黙していた。

「駿T・・・？」

生徒が声を掛けても反応しない。しかし、一言だけ囁くように言った。

「狼・・・」

「ロウ？」

「誰ですか？それ。」

やっと逞真は我に返ってハッとした。

「あ、いや……。なんでもない。波音、大丈夫か？」

「はい。なんとか！」

「そうか。済まなかったな私の不注意でこんなことに。」

「全然いいんですよ！波音だって助かったんだし！」

「そーそー。」

「ってかさ、さっきの人怖くなかった？」

「ヤクザかよー！」

「絶対そうだって！駿T、なんかされないかな？」

「大丈夫だ。……。多分。」

「たーぶーん！！！！？？」

生徒たちの顔が一気に青ざめて、逞真はフツと笑った。

「波音を助けた時点で悪い人ではなさそうだから、心配するな。」

「そ、そうですよね！」

「ねー、波音ー。キスしたことある？」

「え、ないないない！！！」

「あらら……。可哀想に。これがファーストだったのね……」

「え、何のこと！？？」

「もし大晟が駿T呼んできてたとしたら、それが駿Tだったのかも……」

「馬鹿を言うな。それに、あれは命を助ける行為なのだから仕方ないだろうよ。」

「え？え？だから何のことですかっ！？？」

波音の声が洞窟中に響き渡った。

雨の程ぶりもさめ、
天気が安定し、
やっとの思いで逞真たちは洞窟を出ることにした。

「すみませんでした。この全責任は私にあります。」

逞真はホテルの集合場所で頭を下げていた。

「頭を上げてください、駿河先生。生徒も助かったんですし、天気
の予測なんて誰も正確にできませんから。・・・まあ、反省の点
としては生徒から目を離してしまったことですね。」

「はい・・・。」

自主研修が終わり、修学旅行のすべての行事が終わった。あとは
帰るだけだ。

バスの中で・・・

「駿T、ハイこれ！」

賢吾がポツキーを逞真の目の前に出す。しかし、逞真は深い考え事をしていて、うかない顔をしていた。

「駿T！大丈夫？？」

「あ、すまん。ありがとう。」

と、ポツキーを口にくわえるが、周りにいた生徒たちはブツツと笑った。

「駿T！その顔でポツキーくわえないで！ギャップがあり過ぎて・・・腹筋返せ！」

「どうしたんですか？考え事でも？」

「いや、なんでもないんだ。気にしないでくれるか？」

「はい。それより皆寝ようぜ。疲れた。」

「だな☆」

生徒たちの寝息が聞こえ始める。その頃には、逞真はもう自分の脳の世界に入り込んでいた。何を考えていたかと言うと、さっきの男のことだった。

（さっきの男・・・まさかとは思うがやはり狼なのだろうか。Wolf in river・・・狼が川の中にいるという意味だが、それを名前に変えてみると、偶然か駿河狼という名前が浮かぶ。）

駿河狼は逞真の従弟である。確かに何年か前に行方不明になったままだった。

（あれが本当に狼なのだろうか。もともと神経質な性格だったが、あんな感じではなかった。それに・・・瞳が変わった。冷酷で、闇の世界にいるようで・・・。そもそも何故あの天気であんな場所にいたのだろうか？仕事・・・？一体今まで何をしていたんだ。今何をしているんだ。）

『またな、逞。』

その言葉がよぎる。

（またな、だったな。だったら、帰ってこいよ狼。俺は、何があるうとお前を信じてる。）

「ただいま。」

家に帰ると、安らかな笑顔が迎えてくれた。

「お帰りなさい、逞真。」

「腹は大丈夫だったか？」

「ええ。」

その時、バスルームの扉が開く。

「よっ！ご無沙汰〜ってかお帰りねい♪」

その瞬間、逞真は溜息を吐いた。

「何だよ、夫婦でゆっくりしようと思ったのに、何故お前がいるんだよ。」

「なに？居ちゃ悪いっての！？あーらそ！せっかく奥さん助けてあげたのに。」

皮肉を口にするのは妹の聖奈だった。現在一人暮らしなのだが、何故かここにいる。

「なんだと？」

「そうよ、逞真。聖奈ちゃんが来てくれたおかげで生活が便利になつて。」

「そうなのか・・・フツ、お前にしてはやるじゃないか。」

「フツ、萌姉ほつといたアホより随分いい子だと思うけどー？」

「修学旅行だったんだが・・・？」

「私だって研修だったんだけど？」

二人は胸ぐらを掴みあい、睨み合った。

「二人とも止めて！喧嘩するほど仲がいいのはわかるけど・・・」

「仲良くない！！」

息の揃った声に萌はうなだれた。

「はぁ・・・とにかく俺は疲れたぞ。休ませてくれ。」

「帰った途端にコレww歳ねー！！！！」

「黙れ。」

「逞真！もう、疲れてるなら早く寝ちゃいなよ。」

「そうさせてもらう・・・聖奈はさっさと帰れ。ご苦労だったな、研修中なのにな！」

「ヌー!!」

結局、その晩まで兄妹喧嘩は止まなかった。

これが、ある意味逞真の休養だったりするのかもしれない・・・

第6話 修学旅行・後編★（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第7話 疑い

修学旅行を終え、自宅でのんびりと時間を過ごす逞真。

自室にこもったまま出てこない為、萌は気になって中を覗いた。

「逞真？」

逞真は背中を見せ、床に座り込んでいた。

「何してるの？」

「あ、ああなんだ萌か。」

「ずっと出てこないから心配したよ。」

「すまん。これを見てたんだ。」

逞真の持っているものは・・・

「写真？」

古い大量な写真。

「懐かしくてな。手放せなくなってしまった。」

「これ逞真？うわゝ、今と違って可愛い。」

「どういう意味だよ。」

逞真はただ一枚の写真だけを見詰めていた。

「それって、従兄弟の皆さん？」

「そう。って紹介してなかったか？従兄弟のこと。」

「ええ。見るの初めて。」

「そうか。それはごめんな。丁度いい。今紹介するよ。」

逞真は写真の一人を指差した。

「これは、俺が中1の時だから当たり前に皆大きくなっているんだけど、まずこれは智^{とも}。俺の6つ上の兄貴だ。現在はレスキュー隊員として働いている。」

「レスキュー隊員！？逞しいんだね。」

頷いて、逞真は隣を指差した。

「こいつは咲耶^{さくや}で俺と同じ年だ。ボーイッシュで、今確かホステスをやってたかな。それでその隣が・・・」

逞真は一回言い掛けて口を閉ざした。

「・・・」

「え？なに？どうしたの？」

「・・・悪いな。何でもない。こいつは俺の3つ下の狼だ。」

「変わった名前ね。」

「名前もそうだが、性格もともと神経質でオオカミみたいに牙むけていたよ・・・今は知らないが多分そうじゃないかな。」

「どういうこと？」

逞真は一度目を逸らして口を開いた。

「行方不明なんだよ。当時から・・・9年くらい後からずっと。」

「え・・・？」

「まあ大学受験に失敗したらしいし、色々偶然が重なったんだろうな。今までずっと帰ってこなかったが、俺は久し振りに会った気がするんだ。昨日。」

「昨日って修学旅行のとき？」

「ああ。洞窟で生徒を助けてくれたんだ。多分あれは狼だ。・・・それで3人の上にいるのが明彦伯父さんで父さんの兄貴だ。」

逞真は狼の話が無理矢理に終わらせた。

「次に・・・聖奈は置いといて、この双子は陽樹はるきと捺樹なつき。俺の5つ下で、息ぴったりなんだ。今は福祉施設で働いている。で、その上にいるのが楨彦叔父さん。彼が抱いている赤ちゃんが奏多かなただ。俺の13下だから・・・今14歳か。中学生で、懐っこい。」

「なんかこの一家は可愛い子揃ってるね。」

「そうかもしれないな。・・・あの頃は。」

逞真の語尾の言葉が気になったが、萌は敢えて触れなかった。

P R R R R・・・

その時電話が鳴った。

「はい。・・・ああ、伯父さん。ご無沙汰してます。」

それは明彦だった。

「はい、はい。ゴールデンウィークですか。ええ、大丈夫です。わかりました。聖奈にも伝えておきますので。はい。では失礼します。」

手短に電話は切れた。

「・・・ゴールデンウィーク、従兄弟で集まることになった。萌も来るか？」

「うん。なんか楽しそう。」

二人は微笑んだ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「もしもし、聖奈か。」

『もしもしー！！聖奈ですー、お兄様ごっきげんよー！！！！』

妹の高すぎるテンションに、逞真は一瞬携帯を放しかけた。

「・・・何故そんなにテンションが高い。」

『えー？別に高くないけどー！！？』

音声割れた気がする。

「耳が痛いからボリュームを下げてくれないか？」

『だって周りがにぎやかでさあー』

その時幼い子供の声が聞こえた。

「聖奈、お前は一体何をしてるんだ？」

『あのねーっ、今幼稚園に行って研修してるんだー！！もう子供サ
イコー！！兄ちゃんみたいな人一人もいなくてさあ！パラダイス』

「ああそう。」

『で？なんか用ー！？』

「ああ、そうだったな。お前、ゴールデンウィークに休みある？」

『ワハハWWおつかしーですねお兄様。保育所には休みはありま
せんが幼稚園はあるんですよー！頭いい人が何言ってるのおー？？』

「いや、確認したただけなんだが・・・。それより、ゴールデンウ
ィーク中に従兄弟で集まることになったから、必ず来いよ。」

『うん！あ、兄ちゃん送ってって♪まだ免許取ってなくてさー、だから近くなったら行くわ。』

「わかった。じゃあ、切るからな。」

『バッチこい！』

テンションの高いまま、逞真はブチッと電話を切った。

「はぁ・・・」

目の前の産婦人科の看板を疲れた目で見詰めた。

今は萌の診察中で、携帯操作は禁止されているため、外に出て掛けていたのだ。

ふと、けたたましい声が聞こえた。

「イヤァー！！」

逞真は妙に思い、その方向に駆け出した。

角に近くなるとある人影が見えた。

（・・・！？）

それは後姿だった。しかし、はっきりと服装などが見える。

体つきからして男。彼は獣の毛のパーカーを羽織り、細身の黒いズボンを穿いている。髪はうなじまで伸びて、巻き毛であった。

まさしく”狼”。

「狼!？」

そう叫んで角を曲がってみると・・・

「・・・なに・・・？」

そこにそれらしき者はいなかった。代わりに、叫び声の本人がいる。

それは若い女性で、すぐそばにはいかにも怪しい男性がニヤニヤしていた。逞真は溜息を吐いて、その付近に行った。

「やめてください!」

女声が叫ぶ。

「いいじゃん。君可愛いんだからさあ、ちょっとオレと付き合えよ。」

「嫌・・・」

「オレとやらない??」

「何してるんですか？」

低い声で尋ねる。

「んー？」

「今の、とても怪しい行為に見えたんですが、気のせいですか？」

「いやあ、気のせいですよ。オレはただこの人と話してただけでえ。では……」

逞真は力強く彼の腕を掴む。

「痛いす痛いす!」

「女性をナンパして、無責任で、男らしくないですね。」

逞真は女性に合図して逃がした。安堵して手を放す。

「ちょっとお、何するんですか。」

「それはこちらの台詞ですけど。」

「また生徒の腕折ったらシャレになりませんよ、駿河先生。」

「……はい?」

「駿河先生ですよ?」

「……」

沈黙が生まれた。

じっと彼を見詰め、逞真は目を見張った。

「あー!! 藤井基也^{ふじいもとなり}!!!」

「そうですよ、驚きました?」

「驚くも何も……お前何してるんだ!?」

「いや、ちょっとオレ彼女いないんで、そろそろヤバいなあと思いますして。」

「……お前、一生彼女できないよ。」

逞真の前に現れたナンパ男は旧駿河学級の生徒だった。北中に来る前の生徒だ。

「最初気づかなかったぞ。髪がない。」

「そうなんですよ。髪邪魔なんでバサツと♪駿河先生は変わりませんね。握力も。」

「お前さ、態度は変わりなくていいと思うんだが、さっきのどうした？それでも生徒会を2年間続けて結局会長まで上り詰めた男か？」

「もともとこうじゃないですか。ほら、昔のあだ名、エロなり。」

「・・・確かに会長になるの批判が多かったが・・・。。基也はまだ高校だったか？」

「はい。工業高校の3年生です。」

「そう言えば、お前コンピューターに関してはプロ級だったな。元氣そうじゃないか。」

「はい。あ、オレSDカード買いに行くんですけど。では、失礼します。」

「もう二度とナンパするなよ。」

「はい。」

そして基也は遠ざかっていった・・・。

「しまった・・・基也と話し過ぎて狼らしき人物が・・・」

「逞真！」

萌がやってくる。

「もう。どこ行ったかと思った・・・」

「ああ、すまん。・・・どうだった？」

「もうすぐみたいよ。逞真、楽しみにしてて。」

「ああ。」

逞真は穏やかな笑顔を見せ、萌の腹をさすった。

本当にあれは狼だったのか・・・？

逞真は懐かしさと、疑いと、幸せ感に満ちていた。

第7話 疑い（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第8話 帰ってきた哀狼

「こんにちは。」

久しぶりの祖父母の家はとても懐かしい香りがした。隣には緊張した萌といつもながらテンションの高い聖奈がいる。

声に反応したように恵美（逞真の伯母。智たちの母親）が顔を出した。

「おっ、やっと来たな。逞♪」

「ご無沙汰しました。」

「聖奈ちゃんも元気そ……う？」

恵美は萌に目を移してビックリしたように顔を引っ込ませた。

「皆大ニュース！逞が美人さん連れてきたー！！！」

『えー！！！！！！？』

逞真は溜息を吐いた。

「騒がしくて悪いな。」

「いいえ、こういうの楽しいわ。」

バタバタと従兄弟たちがやってくる。

「遅！アンタいつオンナできたの！？」

咲耶が露出度の高い服装で煙草を手にしたまま言った。続いて智が

「遅も、もうこんな年頃か・・・」

とまるで親のように。そして双子が声を揃えて

「妊娠してる・・・」

奏多は

「見えない！」

と従兄弟たちの後ろでキョロキョロしていた。逞真は深呼吸して一言言った。

「・・・中に入らせてくれ！」

「・・・じゃあ、改めて紹介する。俺の妻の萌です。」
「よろしく願います。」

萌は律儀に礼をした。一同は拍手する。

「もう！なんも知らせてくれないんだもん。ビックリしたよー。」
「ごめんなさい。正直、すっかり忘れてました。（^^;）」
「まあ、それはいいとして・・・ホント美人さんだことおー」
「お前も色男だな！」

逞真は咳払いした。

親たちは世間話で盛り上がり、従兄弟たちは従兄弟たちで話が盛り上がっていた。

「逞真から話は聞いてます。」

「じゃあ、俺のことも？」

「はい。智さんですよ。」

智は照れたように後頭部に手を当てた。

「萌ちゃん、もう私たち従兄弟同然なんだし、敬語なんて使わなくていいのよ？」

「そうだよ！」

「で、でも・・・」

「お前は控えめだからな。遠慮するな。」

萌は顔を赤くして頷いた。

「可愛いなあ。うちの誰かさんとは大違いだ。」

「智？この手、灰皿にしたっていいのよ？」

「スミマセン・・・」

「でも確かに咲耶とは違うかな。」

「逞まで・・・」

「いや、そういう意味じゃないよ。咲耶はワイルドな感じだが、萌はお嬢様っぽい。どちらもいい意味で真逆だってことだ。」

「遅、あんた優しいね。」

「クッショー!!! わかんない!!!」

その時、奏多の声が和室中に響いた。

「どしたの、かなたん。」

「聖奈はこの問題解ける?」

聖奈は奏多の手元にあるワークを見てドン引きした。

「いや、私勉強苦手で・・・」

「奏多は何してるの?」

「学校の宿題だって。中学生は忙しいね」

「そういうお姉も手伝ってよ! お兄だって解けるでしょう?」

「無理だよ。俺と捺樹、数学だけは・・・」

智がフフツと笑って頬杖をついた。

「奏多。数学なら遅に聞きな。優しくわかりやすく教えてくれるよ。」

「うん。」

「おい、ちょっと待て智! 俺の交渉は無し!?」

「ダメ・・・なの?」

奏多のうるうるの目に負けた。

「・・・いや。どの問題?」

「やったね☆コレ。」

「ああ、ルートか。応用問題みたいだね。でもコツさえわかれば簡単だよ。」

逞真は奏多のシャーペンを取り、文字を書きだした。そして丁寧に指導していく。

「逞の教えてるところ、初めて見た……。」
「ってかわかりやすっ!」

数分もしないうちに奏多は自力で解けるようになった。

「解けた! さっすが逞!」

「家族に教師がいるって便利だね☆」

「人を道具のように……」

従兄弟たちは笑いあった。

「みんな、盛り上がってるところ悪いけど、ご飯だよ。」
「待ってましたっ!」

「駿河家の定番行事だよな、焼肉♪」

外に集まると、早速肉の焼ける匂いがただよっていた。

捺樹がくるくる回って逞真を指差した。

「今回の肉の世話係担当、たっくん!」

「お、俺? 捺樹も手強くなってきやがった。」

「でしょ? 最近捺樹、恐しくなってきた……」

「女はみんな怖くなるもんなんだな……」

「聖奈も反抗的で困って――」

「何男どもでグチグチ言ってるの! 逞、さっさと肉焼く!」

「咲耶怖い……」

逞真はウンザリ顔で金網の前に腰かけた。萌は普段見れない逞真の様子に微笑んだ。

（逞真っていつも無口で大人しかったのに、なんか中学のときに戻ったみたい・・・）

「萌は何かいるか？」

逞真に声を掛けられ、慌てて振り向く。

「あっうん。何でもいいよ！」

「わかった。じゃあそこに掛けて。無理するなよ。」

「ありがとう。」

二人の姿を咲耶は物思いに見詰めた。

「・・・お前は？何が欲しい？」

「ホルモン！！！」

「おっ、聖奈と言えばホルモンだよな。昔っから変わりやしねえ。」

「うん。歯ごたえが何とも・・・」

「ほら。まだそんなに焼けてないが。」

「ありがとー！！！」

「咲耶、何食う？」

突然自分に振られ、少し戸惑う咲耶。

「あたしもいいの？」

「当然。肉の世話係だからな。」

「サマになってるじゃない。じゃあ、牛サガリお願い。」

「わかった。」

咲耶は”いつもの逞だ”と何故か安心してしまう。

智は肉を頬張りながら尋ねる。

「なあ萌ちゃん。逞っていつもこんな感じなの？真面目で、おとなしくて。」

「・・・これでもはじけてるほうだと思うけど。」

「ウツソ！？なんか結婚してるって感覚くない？」

「いいえ。」

「なんで？なんで？？」

誇らしげに胸を張るのは、何故か聖奈だ。

「それは約一年半同居してた私が教えよう！！兄ちゃんは感情は表さないけど、行為で示すんですっ！」

「それはどういう・・・」

「それはねっ。抱き締めたりー、キスしたりいー・・・」

「マジかよ！？」

「コイツが！？」

「聖奈！余計なことを・・・！」

「ってことは凶星か。信じられないんだけど・・・」

「だったらここで証明したら？今チューするの！！」

「・・・ハアッ！？」

抵抗したのは逞真と萌だけで、他の一同は大賛成。

「いいねいいね！これでまた二人の愛が育むんだし？」

「逞がキスするところ、見てみたい！」

「キースッ！キースッ！」

二人の顔は徐々に赤くなる。

「・・・わかったよ。」

「やった☆」

逞真は決心して萌の肩を掴んだ。

「ほ、本当にするつもりなの・・・？」

「するしかないだろう。」

逞真はゆっくりと顔を近づかせていく。それとともに、辺りの興奮値は上がっていく。

チュッ

逞真は軽いキスを萌の唇にして、すぐに離れた。

「おっ！！」

「よくやった！それでこそ男だ！！」

逞真は照れくさくなり、肉のほうへ目を戻した。

しかし咲耶は嫉妬したような目でただ逞真を見詰めていた。

シャー・・・・・・・・

シャワーの音が響く。咲耶はシャワーを浴びていた。

「・・・・・・・・どうしたんだよ、あたし。なんでこんなに苛ついてるの？」

自分に問いかける。

「あれは仕方ないじゃない。だって夫婦なんだから。でも・・・・昔の逞が、今はなんか遠い存在に感じる・・・・・・・・。」

咲耶は勢いに任せて蛇口をひねった。

（歳が同じせいか、気が合って、ときには喧嘩したり、厳しいこと言われたりした。）

咲耶は懐かしい様に逞真の言葉を思い出した。

『反抗しすぎて智を困らせるなよ?』

『咲耶は気楽でいいよな! お前に俺の気持ちがわかるかよっ!?』

『・・・俺は教師として道を踏み違えないようにこれからを変えていくさ。だから咲耶もわかれよ。ホステスなんて、俺の考えてる世界の中で不要なものにすぎないから、踏み違えないでほしい。』

(ずっと、傍にいてくれると、思ってた・・・。だけど、逞は萌ちゃんを選んだ。それは理解しなきゃいけないのに。もう四捨五入して30近いのに、どうしてこんなことが納得できないんだろう・・・。)

その時、不意に洗面所の扉が開く音が鳴った。

隙間を覗いてみると、それは逞真だった。手を洗いに来たらしい。咲耶は決心したように口を開いた。

「逞・・・」

そちらも気づき、風呂場のほうを見た。

「なんだ、風呂に入っていたのは咲耶だったか。ここは”湯加減はどうですか。”とでも訊くべきか？」

「いいよ、そんなこと訊かなくて。」

「はは、そうか。」

やはり咲耶は安心してしまう。

「逞。」

「なんだ。」

咲耶はハツとして自分の短い髪の毛を跳ね上げた。

「う、ううん。何でもないの。ごめん。」

逞真は不自然な咲耶の対応に眉を顰めた。

「なんだよ。そういうの生徒でもいるが一番気になるんだよな。言い掛けたものは言ってしまう。」

「逞はああいう子が好みなの？萌ちゃんみたいな女の子。」

逞真は気が抜けたように笑った。

「・・・ハハ。そういうことか。」

「わ、笑うことないじゃない。ただ訊いただけなのに！」

「済まない。だが、咲耶がそんなこと言うなんてと思ってな。ごめん、ホント悪かった。」

逞真は軽く言ったが、咲耶はまだスツキリしていなかった。

「好み、いや、愛してるよ。じゃないと結婚していない。」

「そっか。そうだね、やっぱり。ごめん、ヘンなこと訊いて。忘れて。」

咲耶は焦っていた。自分の心が今の一言で押しつぶされるんじゃないかと思ひ。それはドアごしで逞真にも伝わっていた。

不意に足音が近づき、スライドガラスからシークレットが見える位置まで来た。

「ちよつ、ちよつと！開けないでよ！？」

「はあ？しないよそんなこと。タオルを取りに寄っただけ。」

「そ、そう・・・。」

「だがな、俺は咲耶が好きだぞ。」

唐突に言われ、咲耶はキョトンとなる。

「は、はい？」

「ああ、悪いな。俺は急に話の転換をするから上手くかみ合っけなかつたな。さっきの答えの続きだ。」

「あ、ああ。って、え——？」

「仕方ないな。もう一度言う。咲耶が好きだぞ。」

「それって言っていること？浮気男。」

「そう言う意味じゃないって。誤解しないでくれ。人間としてだ。」
「あ、そっち。」

「咲耶は接客してるからか、コミュニケーションが上手いし、サラッとした性格だから、居心地がいいんだ。俺と違って精神年齢も高いから、懂れる。」

「遅って精神年齢低かった？」

「頑固だろう？それに見せないだけで、我儘だ。」

「そうかな・・・？」

「ああ。だから従兄弟としてお前の気持ちは変わらない。いいか？」

咲耶は見破られたように目を見張った。

「アンタ、あたしの心読み取ってた訳！？」

「いや、ただそう思ってるかなって。」

「流石教師・・・」

すると、リビングのほうで騒がしくなっているのに気付いた。

「大事な客が来たみたいだ。」

逞真は静かに呟いた。

「なに？」

「お前も早く上がってこいよ。」

逞真はそのまま洗面所を後にした。

扉を開けてリビングに戻ると、一同全員が立ち上がっていた。

「・・・どうした？」

「逞真。見て。」

萌の見る方向を見る途端、聖奈にシャツの裾を掴まれた。

「聖奈。」

「・・・狼君・・・」

”え・・・?”

逞真は一瞬吐息が止まった。

玄関にはあの、修学旅行で見た姿があった。

「ウ・・・Wolf in river・・・」

彼は乾いた笑みを見せた。

「まだその名で呼んでくれてたんだ、駿河逞真。・・・いや、逞。」
「な、なんのこと？ねえ、狼なんでしょ？狼なのよね？」

恵美が言った。まだ暗い笑みは続く。

「やっぱり、狼・・・」

智は震え、拳を握りしめた。

「お前・・・お前・・・」

そして、狼の胸ぐらを掴みかかった。羽織っている獣毛のパーカーは勢いに床に落ちる。

「一体今まで何やってたんだよ!？」

狼は何も言わない。ただ冷酷な瞳を智に向けていた。

「な、なによその服装・・・」

そう呟いたのは紘子。全身黒で、胸元は大きくはだけ、首には複数のチャームネックレス。耳にはピアスだ。

「……別に普通の格好ですよ、紘子叔母さん。」

その声に温もりはこもっていない。

「もういっぺん言ってみろよ!! それはまるで……ヤクザじゃないかよ!？」

「智、落ち着け。」

なだめたのは逞真。

「9年もいなくなってそして戻ってくるなんて、何かあるのかもしれない。まずは話を聞くべきじゃないのか？」

「……そうだな。」

狼は嘲笑をし、ソファに腰かけた。

「確かに俺は他人から見れば、ヤクザかもしれねえ。」

「……」

「それは認める。ヤクザの片割れみたいなものだから。正確に言えば、その用心棒。」

一同は驚くしかなかった。だが咲耶だけは

「無責任ね、ホント。」

と冷ややかに言った。

「散々家族に迷惑かけておいて、さらさらと自分はヤクザの用心棒です? ふざけんじゃないよ。もっとすることがあるでしょ?」

「わかってるさ。だから、俺もそろそろ足洗おうと思ってな。つい最近までそんなこと思いもしなかった。だけど、あの日、逞の必死な顔を見ていたら、帰りたくなって堪らなくなったんだ。だから、戻ってきた。」

「狼。」

狼は智のほうを向いた。

「兄貴、本当に迷惑かけたと思う。皆にも。だから俺、恩返ししようと思ってる。」

逞真は修学旅行の時を思い出した。あの時生徒を助けてくれたのも、自分への恩返しだったんだと。

「まずは謝る。いままで迷惑かけてごめんなさい。」

狼は頭を下げた。皆は顔を見合わせた。狼の頭を無理矢理起こしたのは智だった。

「その言葉、忘れんなよ。」

「ああ。」

智は困ったように笑って、狼にデコピンした。それを合図のように雰囲気は緩和した。

奏多が狼の手を取る。

「狼、これから従兄弟たちでマリオカートやるんだ。一緒にやろう！オレ二台持ってるから！！」

狼は苦笑する。

「なんだか、陽樹のキャラが奏多に移っちゃったようだな。」

「兄弟だから！」

「早くしようぜ。まさか、やり方忘れたとか言わないよな？」

「無論だぞ。駿河家恒例行事を何年続けたと思ってんだよ。」

笑いながら和室に入っていく。

・
・
・
・
・
・
・

「マリオ死ねーっ!!」

「なにっ!? スターだとお!? 誰だっ! . . . 聖奈かあ! !」

「智ちゃん1位の座は頂きっ♪」

「甘い。」

ゴオオオオオ . . .

「キラー! !?」

「流石逞。計算済みだ . . .」

マリオ.. 智 ルイージ.. 狼 デイジー.. 咲耶 カロン.. 逞真 ヨ
ッシー.. 聖奈 ワルイージ.. 陽樹 ピーチ姫.. 捺樹 謎の頭巾キ
ャ.. 奏多 でエンジョイしている。萌は観客。

「このっ、骨!」

「骨言うな。カロンは大切なキャラだ。」

「いっつもカロンだよね、逞。」

「そう言えば皆毎年同じキャラ . . . 狼も久々なのにコツ取り戻
しやがってよ! !」

「ザマー」

「うわウツザ! ゼツター最下位にしてやるう! !」

その時、急に陽樹が呟いた。

「狼がいなくなった原因って、やっぱり俺らが関係してる感じ?」

「いきなりそれいく! ?」

「だって気になったんだもん。」

狼は困ったように笑った。

「別にてめえらのせいじゃねえよ。悪いのは全部俺自身なんだ。受験に失敗したのは俺のせい。逃げ出したのだって俺の勝手。勝手に自分を責め入れたのだって俺の責任じゃねえか。弱いんだ、俺は。自分でもわかってる。」

「馬鹿だね。軽々しくそんなこと言っただけで無駄。アンタが弱虫だってことは皆とつくの前から知ってるんだから。」

「咲耶、もっと言葉をオブラートに包めないのか？」

「あら、狼にはこれくらい言っというて大丈夫。躑ね、躑ね。」

「悪かったなっ！・・・とにかく気にしないでくれよ。俺も俺なりに努力するから。」

「おうよ！！」

「じゃあ戻ろっ！」

夜も深くなり・・・

「さてね、寝る場所が問題なんだけど・・・」

従兄弟たちはいっせいに溜息を吐いた。

『寝床狭っ!?!』

「この家、風呂がデカイ割に他小さくてさ、フロアは多いのにとんど物置という・・・」

「親たちも親たちだよねッ!」父さんたちは父さんたちで寝るから、お前ら自分たちで工夫しろ。b y 雅彦”だって!」

「私たちもう大きいことわかってんのかね・・・」

従兄弟たちは顔を見合わせた。

結局のところ、男と女に分かれて寝ることとなったのだが、その男女の間はどうにもできず、くつつくことに。で、その代表者は・・・

「兄ちゃん変態でしょ変態!?!」

「何もしないから。だから落ち着けて。親起きるぞ。」

雅彦家約二名・聖奈&逞真。理由は、仲よさそう。それだけ。

「絶対ヤダー！なんでこんな奴と隣り合わせで寝なきゃいけないの……。何かするって必ず！！」

「聖奈、仮に君の体に触ったり変態行動起こしたとしよう。教師としていかなもんかい？」

「そっか。ってかさー、何で萌姉と寝ないの。」

「だって妊娠してるんだから、くっつかないほうがいいじゃん。現に萌ちゃん一番端っこでできるだけ離れてる。」

「ごめんね、聖奈ちゃん。」

「うわーん！！」

やむを得ず、そのまま寝ることに。しかし……

「うーん……」

聖奈が寝返りを打つてみると、そこには整った兄の寝顔。

「ギャァー！！」

「なっなんだよ!？」

「やっぱ耐えられない。コイツやだあ。それならかなたん連れてきたほうがいい。」

「いや、逆にこっちが……」

「あっちいけ！」

「無理言う……痛いつて！へ、ヘンなところ蹴るな！真面目に痛いから!!」

「うわー……逞気の毒に……」

「他人事のように……わ、わかったから！背中むけて寝るから蹴るなって！」

聖奈の蹴りが止んだ。

「んじゃ、おやすみ。」

「・・・おやすみ。」

「遅、女ってホント恐いな・・・」

「おやすみ!!」

「お、おやすみなさい・・・」

朝日が出たばかりの時刻・・・

小さな物音に、逞真は目を覚ました。

「ん・・・」

背後を見ると、昨日とは逆に聖奈のほうから近づいていた。

フッと微笑み、先を見ると、狼の姿がなかった。

「……………」

逞真は静かに布団から起き上がり、部屋を出た。

居間には、まだ誰も起きていないようで誰もいなかった。しかし、玄関のほうでゴソ・…と音が鳴り、そのほうへ行ってみた。

「どこへ行く？」

狼はビックリして、素早く振り向いた。

「……遅か。いや、これから足洗いに行こうと思ってな。」

「そうか。無言なのが、残念だが。」

「場合によっては、命を落とすこともあり得る。だから、心配はさせたくないんだ。」

「逆に無言でいなくなれば余計心配すると思うが？」

「もう決めたんだ。自分一人で何とかするって。だから、行く。」

眩しい朝日を浴びながら、逞真は狼を見送った。

「絶対帰ってこいよ。もういなくなるな。」

「わかってる。必ず帰ってくるから。」

狼の背中が、暗いものではなくなっていた。

第8話 帰ってきた哀狼（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第9話 驚異的なシュート

ゴールデンウィークは長い。

俺が思うようになったのはつい最近のことだった。

部活は毎年休養日として扱われるし、とっくにするべき仕事が終わっている。その現状に退屈感を覚えているのだ。

「萌、なんか困っていることはないか？」

そう訊くと妻の萌はこうしか答えない。

「ううん、全然大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。」

まあ、困っていることを追及するのもよくないことだからあまりしつこく言わないでおこう。

それにしても・・・退屈だ。

俺は気分転換に外に出掛けることにした。

外に出てみると、心地よいバスケットボールの音が響いていた。

隣の家の庭からだ。覗いてみると、そこは広くて、人がポツリと見えるだけだった。

「あれ・・・駿河さんだ！駿河さん！！」

その彼に声を掛けられる。

「おう、凌空^{りく}。朝から早々頑張っているな。」

”凌空”とは、北中の隣町の学校である東中学校の男バス部で、うちの隣に住んでいる子供だった。越してきたときから、俺が北中の女バス部の顧問だと知り、親しくなっている。

凌空は笑顔を見せ、駆け寄ってきた。

「駿河さんは部活ないんですか？」

「ああ。凌空もなのか？」

「そうなんです！最後の中連なんで、精一杯頑張ろうと思って自主練を。」

「精が出るな。」

凌空はふと思いついたように俺を見た。

「そうだ！駿河さん、俺と勝負してください！」

その途端、俺の血の気が騒いできたのがわかった。

「フ・・・面白いことを言うな。」

「そうですか？一度、女バスの名門校と勝負してみたいなと思ってたんです！」

「俺は顧問だぞ？」

「そのほうが都合イイですよ！それに、駿河さんって男バスのエースだったんでしょ？」

「・・・まあな。いいじゃないか。楽しみだ。」

「ホント！？早くやりましょ！あ、どうぞ入って！！」

「お邪魔します。」

俺はこの庭を目で把握した。たとえ中学生でも手は抜かないつもりだ。

「凌空、身長はどれくらいだ？」

「174cmです。」

「ならハンデはいらないな。よし、凌空がオフェンス、俺がディフェンス。2回ゴールに入れたらお前の勝ち。いいな？」

「はい！」

俺はジャージの上を脱いでTシャツ姿になった。凌空は目つきをキツと変えて、ボールを持つ。

「いつでもどうぞ。」

俺がゴール付近に構えて言うと、直ちに凌空はやってきた。

動きは割といい線いつている。ボールのドリブル捌きも無駄がない。さあ、どうくるのか・・・

シュッ

凌空は身を小さくして俺という壁をかわそうとした。俺も俺で手を使いながらボールを取ろうとする。このままいけば、確実に俺の手にボールが当たり、弾くことができる。そう確信したが……

キュツ、ポスツ

それは一瞬だった。俺の目がかすんだ気がして、凌空が見えなくなったと思う。その隙に凌空はシュートを打ったんだ。俺の目を誤魔化したのは紛れもなく凌空そのものの動きだった。

速い……

そう思うしかなかった。

「へへッ、どうです？俺の動きは。」

「大したものだ。中学生とは思えない。こうなったら、俺も本気を出让せてもらうぞ。」

「望むところっ。」

俺は凌空にボールを渡し、再び構えた。こうなったら、高校時代のように必死に場を把握するか。

凌空は直進してくる。このパターンで行けば、俺の目の前でかわし、シュートを打つか、そのままロングシュートを決めるか、それか、ターンなどの動きを含め、俺を惑わすか……。あの速さを俺も再現すれば、ボールは弾ける。が、凌空がどの速さでくるか、まだわからない。

凌空の一步出した前足で俺は決めつけた。ロングだ。半歩ほど近

づき、ジャンプすれば余裕で間に合う。よし、行こう。

一瞬のその判断で俺は凌空の投げたボールをキャッチした。

「うえ!?!」

俺は微笑んでボールを返す。

「本気、出したが。」

「くう・・・流石エース・・・でも次は負けません!!」

凌空は素早くゴールに向かって駆け出した。敵より早めに出る作戦か。でも、そういう選手は数多く体験したんだ。すまん、凌空。

凌空を追いかけ、手を伸ばす。が、凌空はシュートしたようなフエイントを見せ、そのままドリブルした。

「なにっ!?!」

俺は思わず声を出してしまった。凌空はにと笑って俺の脇をタインして、そしてシュートを決めた。

ボールは直ちに落下して、バウンドする。

俺は息が上がっていた。凌空もだ。無理もないだろう。

「駿河さん、俺の勝ですね!」

「凄いよ、凌空・・・俺も実力が落ちたな。面目ない。」

凌空は首を振ってくれた。

「あ、最後に一本打たせてください！」

そう言って、ゴールの目の前に立つ。そして、高くジャンプして、一本のシュートを打った。

シュツ

俺は目を見開いた。

なんと無駄のない確実なシュート。そして、その動き。俺は見惚れてしまった。

「ふう。駿河さん、ありがとうございます！」

「凌空・・・今のシュート・・・」

「え、今のが何か？ま、まさか変なところでも？」

「いやとんでもない。その逆だ。・・・それ、そのままいけば高校でも活躍できるぞ。」

「ホントですか！？ありがとうございます！」

礼を口にする凌空だが、自分がどれだけ凄いかわかっていない気がする。しかし、俺にはわかった。数多く戦ってきた学校のなかでこれ程綺麗なシュートは初めて見た。勿論、中学校の中ではだが。

「ありがたいな、凌空。勉強になった。またやりに来てもいいか？」

「勿論です。いつでも待ってますからっ！」

凌空は元気よくそう言ってくれた。

「それじゃ、俺はいくよ。またな。」

「はい！！」

凌空に見守られながら、俺は庭を出ていった。

それにしても・・・

あのシュートが今でも目に焼き付いている。市内名門を誇るこの女バス部員の中であれだけのシュートをできる者があるのか？そう思えば、今の自分でさえあそこまでできるのか少々不安だ。

俺は思わず立ち止まった。

無性に自主練がしたくなってくる。遅れを取ってはならない。俺の負けず嫌いな精神が働きかけた。

直ちに自分の家に戻った。

ガチャ！と思い切りドアを開けると、萌はビックリしてリビングから顔を覗かしてきた。

「びっくりした……。お帰りなさい、遅真。結構早かったね。」

「ああ……。萌、バスケットボールはどこにしまった？」

「バ、バスケットボール？どうして？」

「これから自主トレーニングを試みる。」

萌はおかしそうにクスクス笑っていた。

「急にどうしちゃったの？体力落ちたとか？」

「そんなところだ。それよりどこだ？」

「確かガレージだった気がする。探せばあるよ。」

「わかった。ありがとう。」

俺は再び外に出て、ガレージでボールを探した。

数分もしないで見つけたボールは新品のように輝いたオレンジ色をしていた。いつも屋内で使用していたせいかもしれない。よし、空気も正常だ。

隣の庭に立ち寄る。引っ越してきたときからこのゴールは俺も使っていることになっているから、今回は勝手ながら入らせてもらっ

た。

すぐにボールを持って、フリースローの位置についた。気合を込めて、シュートをきめた。

ポスツ

まあ、いままでの成績からしては標準的なシュートだ。どこも引つかからずかごに入る。

でも納得はいかない。凌空はもっと正確な動きだった。

もう一度シュートをしてみた。いや、これも違う。

再び。・・・先ほどのほうが近かった。

全部シュートは収まっているけれど、納得できるまで続けていた。いくらやっても凌空のようにはできない。何故だ。これは年齢の差だろうか？中学生より身に付きが悪いのは確かだが、それにしてもどうすればあのように学べたのだろう。

まさに・・・天才。

もう100本くらいのシュートは打ったであろう。その時、庭の

外から声がした。

「す、駿T!？」

この呼び方からして生徒なのだろうが、その人物が意外過ぎて思わず目を見張ってしまった。

女バスのキャプテン兼駿河学級メンバーに遭遇するとは、今日の俺は運がいいのだろうか。

「伊月。」

「先生何してるんですカーッ!？」

大声でこのまま話すのもなんだ。俺は庭の外側に近づいた。

「ちょっとトレーニングをな。」

「ここ先生んちですかッ!？」

「いや、隣だ。」

「ああ、なんだ。ってえ!？つまり先生んちの近所まで来ちゃったわけ?」

「お前は何しているんだ?」

伊月は、今にも愚痴を口にしような何とも言えない顔を向けてきた。

「駿T!聞いてくださいよ!！」

「な、なんだ?」

「ゴールデンウィーク中、北中恒例の部活休暇デーじゃないですか。そこもツツコみたいところなんですけど、まず聞いてください!体鈍っちゃうんで市民体育館行って練習しようと思ったんですネ?」

「おう、偉いじゃないか。」

「でしょ！？天才なみですよ。なのに祝日中はどこも開いてなくて！さまよってたらここまで来ちゃったんですっ！」

「はぁ、それは災難だったな。」

伊月はうんうんと頷く。

「まずなんでゴールデンウィークが部活ないんですか！他の学校はこの時期に伸びるのにィ……」

「いや、そんなこと言われても、来た時から決まってたことなんだよ。」

「駿Tたすけて……」

俺は考えた。

「そうか、その意欲に免じて……いい場所を与えてやる。」

「え、ホントですか？」

「ああ。この庭だ。ゴールもあるし、広いから使いやすい。」

「え、でもいいんですか？」

「いいよ。責任は私取るから。入れ。」

「お邪魔しま〜す♪」

伊月は嬉しさと不安を交えた笑顔を見せた。

「うわっ！何ココ、広っ！！」

「そうだろう。自由に使っているから。」

そう言っ、場を離れようとすると、

「待って駿T！」

と背後から叫ばれた。振り向かざるをえない。

「どうした？」

「あの・・・見てくれませんか？せっかく顧問いるのにもったいないじゃないですか！あ、忙しいならいいですケド。」

「まあ、正直暇だったんだ。いいだろう。見てやる。」

「やった☆ちゃんとアドバイスしてくださいよう？」

「わかってる。」

伊月はニカッと笑って、ボールを持った。10mくらい離れてそこからゴールに向かって走る。

別に標準的な動きだが、納得は行かない。納得のいくプレーがどんなものなのかイマイチわからないが。

スリーポイントの位置からボールをシュートすると、それはギリギリ入った。

「どうですかっ!？」

「・・・」

黙っていて悪い、伊月。しかし、俺は今でも凌空の動きを見てしまっただけ付いているんだ。それより劣った動きは、正直言っちゃまらない。でも、女バスとしてスリーポイントが決まるのはプレーに強い。

「まあ、標準的な動きだ。」

「駿Tがそうやって言うのは、まあまあってことですよね。」

「そういうことだ。だが、スリーポイントがよく入るのは伊月のいいところだから、これからもそれが劣らないようにすればいい。」

「はい！ありがとうございます。」

元気よく礼をした伊月は再びゴール下に立つ。そして、ドリブルを始めた。・・・無駄が多い。動きはそれなりに早い、無駄のある動きがそれを抑えてしまっている。

俺は立ち上がって、素早く伊月のボールを跳ね返した。

「えっ!？」

その反動で伊月自身も倒れてしまう。

「ああ、済まなかったな急に。大丈夫か？」

「あ、ハイ。先生・・・動きが速くて、ビックリしただけです。」

「もっと速い奴なんてたくさんいるぞ。これくらいでビビるな。」

「なんか、普通の部活みたいですね。」

伊月が苦笑していた。

その後も厳しくなってしまった練習が続き、伊月はボロボロだった。

ゴクッ

「ふはあ、生き返るう〜。」

俺の家で、伊月は俺の出した炭酸飲料を飲む。

「悪かったな、厳しく指導して。」

「いえいえ。いつものことじゃないっすか♪」

すると、萌が2階から降りてきた。

「あら、いらっしやい。」

「あ、萌さんだ！こんちわ〜。」

「逞真に誘拐されたの？」

「ハイ？」

「馬鹿。お前がやってきたくせに。萌もなに言ってるんだよ。」

「だってねえ？」

「そうですよ。」

「意味が解らない。」

俺は女に弱いとつくづく思った。

「あ、伊月。せっかく家に来たんだ。いいものを見せてやる。」

「え、なんですか!？」

不思議がる伊月を引っ張り込んで自室に連れ込んだ。

パソコンの電源を入れ、操作する。その間、伊月はじっと俺の部屋を見渡していた。隠すようなものもないし、別に気にしないが、近ごろの女子というのはこういうことに敏感なんだな。

「駿Tの部屋って綺麗ですね。真面目な性格がよく出てます。」

「褒めてくれているなら、ありがとうよ。それより、もっとこっちに来てくれ。」

伊月は何に警戒しているのか、ズルズルと近寄ってくる。

「画面を見てください。」

「これ、何ですか？」

「市内の女子バスケットボール部の詳細に対してまとめたものだ。」

すると、突然伊月はホッと胸を撫で下ろした。

「よかったあ。なんか怪しいものを見せてくるかと思った……。」

「誰がするかよ。」

「でも……凄い。駿Tこんなもの作ってたんですか。」

「ああ。時期を見て部員にも見せようと思ってたんだが、お前はキヤプテンだしな。先に見せておく。」

伊月はしばらくそれを見詰めていたが、ふと呟いた。

「個人の動きまで正確に出されてる……。あ、この人、ライバルのところでいつも取られるんだ。」

俺は微笑みを浮かべた。本当、バスケのことになると、誰よりも集中するんだな。

「今日はありがとうございました。中連前なんで、スツゴイ役立ちました！」

「また何かあれば私に言え。」

「ウィツス☆」

伊月は元気よく自転車をこぎだした。その背中が、昔の俺のよう
に錯覚してしまったのは気のせいだろうか。

ゴールデンウィークは長くて、退屈するが、たまにこんな日もいいかもしれない。偶然、誰かに会ったり、天才的な力を目にしたり。

何故か、忘れ去られていたものがよみがえってきたのだった。

第9話 驚異的なシュート（後書き）

更新、遅れてすみませんでした^^；
次回もよろしくお願いします☆

第10話 中体連という名の感動

「駿T！」

朝、教室に入った瞬間に逞真は生徒に声を掛けられた。

「なんだ？」

「こないだの地区大会、優勝おめでとです！！」

（ああ、そのことか。）

逞真は微笑んだ。

「ありがとうよ。だが、頑張ったのは私ではなく女バス部だからな。私に言うのであればちゃんと女バス部にも言っておけよ。」

「はーい♪あ、霞^{かすみ}ィ、優勝おめでとー！！」

その生徒は近くにいた霞のほうへ声を掛けに行った。

そう、北中女子バスケットボール部は毎年のようだが、地区大会で優勝を制した。しかし逞真はまだ満足は行っていないかった。

（本当の正念場は次戦の全国予選大会だ。いつもその時に敗退し、全国に行けていない。思えば、俺がこの学校に来て、一度も全国に

行ったことがない。」

逞真はチラリと女バス部を見た。

（今年の3年生は、俺の受け持った生徒。いい思い出を残してあげたい。今年こそは・・・必ず優勝を・・・）

♪キーンコーンカーンコーン♪・・・

「はい、ホームルームを始めます。」

6時間目、学活

「はい、今回は中学校体育連盟の全校応援についてです。」

「ついに来ましたっ！」

拍手が起こる。3組はすぐに拍手し、盛り上がるのが特徴だ。

「そうだ。スポーツ部はこの日のために日々頑張ってきたことと思う。そこでだ。今年も北中学校は全校応援をすることとなった。応援する部活は、1日目に男子バレー部、2日目にサッカー部、3日目に女子バスケット部だ。」

「え、全校に見られんの！？頑張んなきゃ……」
「うわ……緊張する……」

逞真はフツと微笑んで説明を続けた。

「当日は私は着けないが、副担の新城先生の指示に従ってくれ。自転車車で総合体育館に行くのだが、駐輪場は……」

そして放課後になり、部活動の時間帯になった。

「いいか、明日からの3日間は中体連だ。他の部活も懸命に頑張っている。だから、女子バスケット部も、頑張るんだぞ。」

『ハイ!!』

「全力を尽くせ。以上。」

そして、いつもの練習がスタートした。

当日

3日目。総合体育館にはもう北中の生徒は揃っていた。

「ねえ、北中どこにいんの？」

「ホラ、あそこだよ。右側のベンチ。駿Tでわかった。」

「あ、ホントだ。珍し、ジャージじゃん。」

「そりゃ流石にジャージでしょうよ・・・」

女子バスケット部は全員が強い眼差しを持っていた。逞真は頷く。

「よし、今日は優勝をとれ。それが私からの約束だ。」

『ハイ!!』

「見る。全校生徒も応援に来ている。きちんと応えてくれよ。」

部員は後ろを振り向いて、おかしそくに笑った。

部員は応援席の前に整列し、礼をした。

「気を付けー、宜しく願います!!」
『よろしく願います!!』

全校生徒は拍手した。

そして、プレーは始まった。
これに勝てば、全国に行ける。しかし、その相手はライバル校で、
去年も負けていた。

生徒は掛け声をかけて精一杯応援した。

「ゴーゴーレッツゴー! レッツゴーレッツゴー!!」
「ディーフェンス! ディーフェンス! ディーフェンス! ディーフェ
ンス!」

伝統の女バス部の掛け声だ。この日のために全校生徒は覚えたの
だ。

「頑張れ伊月ー!!」
「美悠、ナイス!!」

もう無我夢中だ。

後半戦。

「はぁ・・・はぁ・・・」

どちらのチームにも疲れと焦りが見えた。

点数はなんと80対82。北中が2点負けていた。しかもタイムリミットは30秒。一回普通にゴールを決めたとして、それでも同点になってしまう。

「・・・」

逞真も流石に黙っちゃいない。思考回路を循環させて、どうにか勝つ方法を考えていた。

（このままでは不可能に近い。皆体力を消耗していて、動きが遅くなっている。今も、敵に取られてばかりだ。これでは体力も、時間

も無駄になってしまう。)

拳を握りしめた。

(クソ・・・、今まで死ぬほどの思いをさせながら練習してきたのに。いつものようにここで終わってしまうのか・・・!?)

女バス部も決死な思いだった。

(そんな・・・!これじゃあ、駿Tを全国に連れて行くって、喜ぶ顔を見るって約束を叶えられない。そんなの・・・嫌だ・・・!!)

その時、一人の女子が相手のボールを取った。

「・・・ッ」

伊月だった。

(伊月・・・)

逞真は思わず目を見開き、立ち上がった。

ガタッ

タイムリミットはあと・・・

3

2

「頼む、入れてくれーっ！！！」

その瞬間、伊月の背中に翼が生えた。それは高く羽ばたき、そこから打ったシュートは確実にゴールの中に入った。

ブーッ！！

それとともにブザーが鳴る。

「ブザービートだっ！！」

「点数は・・・？」

沈黙が生まれる。

点数票は、スリーポイントで北中学校に3点追加され、82対83。北中が勝利に導かれた。

「・・・やっ・・・た・・・やった・・・。」

伊月は呼吸を荒がし、その場にしゃがみ込んだ。

歓声が起きる。逞真は伊月に寄り、その体を抱き締めた。

「よくやった。伊月・・・ありがとう・・・。」

「先生……の、お陰……です。」

伊月はへとへtoになりながら呟いた。

「あの日、私に個人練習させてくださいました。そのおかげで、シ
ュートの確率が上がったんです。」

その顔は誇りに満ちていた。女子バスケット部は涙を流した。

拍手を続ける生徒たち。3年3組は

「やっぱり、駿Tには敵わないね。」

「こっちまで感動しちゃう。」

と駿Tの笑顔を涙目になりながら見ていた。

「なんか、いいな。こういうの。」

全国大会は横浜で行われ、惜しくも3位という結果になった。

「せーのっ、全国3位おめでとー!!」

バイキングの一室に女バス部の声が響き渡る。

『ワッ!!』

逞真は苦笑した。

「まるで小学生だな。」

「だってえ、嬉しくてしょうがないんですもん!!」

今、全国3位のお祝いが行われているのだ。

「今日は私の奢りだ。どんどん食べ。」

『ハイ！！（＾Ｏ＾）／』

「駿Tの奢りならどんどんイケちゃうねb」

「どういう意味だ。」

女バス部員は楽しく昼食を食べた。そのなかで、伊月が隣の奈緒に声を掛ける。

「ねえ、よかったね。叶えられて。」

「え？」

「全国に行って、駿Tの喜ぶ顔見るって約束。」

奈緒は肉を頬張りながら、微笑んだ。

「そうだね。だって、全国行ったときの駿Tの顔、本当に幸せそうだったもん。」

「？なにか言ったか。」

「「なんでもありません！！」」

そして、そのまま引退式になった。

「なんか、さっきまで凄く盛り上がっていたのにいきなりしんみりしてしまったようだな。」

頷く部員たち。

「じゃあ、私のほうでまず話させてもらう。」

改まったように全員が正座した。

「・・・まず、おめでとう。全国3位というのは凄く名誉なことだと思う。私も、嬉しかった。だが・・・3年生はこれで引退になってしまう。それはとても残念だ。」

その瞬間、じわ・・・と涙が込み上げてきたのは全員だったかもしれない。

「全国に行けると確信した時、私は本当の絆というものが身に染み込んだ。北中女子バスケットボール部という絆。今まで、バラバラになったこともあった。部活を無期限停止にしたこともある。練習も死ぬほど厳しかっただろう。それなのにお前たちはついてきてくれたな。」

「う・・・うう・・・」

隣の人の肩に顔を埋めたり、目をこすったり、泣きじゃくる部員たち。

「私に悔いはない。お前たちが全力で応えてくれたから。そして・・・私に大きな夢を見させてくれて、感謝してもし切れない。本当に、ありがとう。」

「わああああ!!」

想いがピークまで込み上げて、大声を出して泣いた。

「先生、今まで本当にありがとうございました・・・!最後にこんな風に終れて、いい思い出になりました!」

「次からもうバスケット部に行ってパス練することも、駿工の厳しい声も聞くことができなくなるなんて、寂しいです。」

「でも、この気持ちは一生・・・忘れませんからっ・・・!!」

逞真は微笑んで3年生全員の頭を撫でた。

「泣くな。最後は笑って終わるぞ。」

『ハイ!!』

「伊月、最後の挨拶だ。準備はいいか?」

「グスッ、はい。」

伊月は涙を拭って満面の笑顔を見せた。

「気を付け、お疲れ様でした!」

『お疲れ様でした!!』

感動し続けたこの中体連は、
逞真の永遠の思い出に刻まれた。

第10話 中体連という名の感動（後書き）

ああ・・・涙が・・・↑作者が何いっとるんじゃボケ！・・・っ
て感じですね。

少しか感動してくれれば幸いです。
よかったね、女バスの皆さん。

次回もよろしくお願いします☆

第11話 謎の暗号大騒動★デスレター（前書き）

謎の暗号大騒動の開幕です☆

第11話 謎の暗号大騒動★デスレター

中体連も終わり、6月下旬になった頃……

「先生、ちょっと。」

「なんだ？」

ホームルームを終えたばかりの教室で逞真に呼びかけたのは、神路勝だった。その隣には稲田峻介いなたりようすけがいる。

「放課後、相談があるんですけど。」

その二人の顔は、ためらいがちであった。

放課後になり、逞真は二人を教室に入れた。

「それで、一体なんだ、相談とは。」

彼らは顔を見合わせて決心したように頷いた。

「先生は、デスレターってご存知ですか？」

「・・・デスレター？」

直訳して、死の手紙。なんとも不気味な表現に、逞真は不審な気分になった。

「知らないな。また達の悪いネット上での噂か？」

「違います！こんなのネットでなんか広まったらどんなことになるか・・・」

「は？」

「実物見ればわかります！」

「な、実物持っているのか。」

「ええ。」

リュックの中から出された一枚の紙を、受け取ってみる。中身を開いてみると、逞真は眉根を寄せた。

「」この暗号を解かなければお前の関係者もろとも被害が起きる。

また、5日以内に解かなければ、死ぬ。免れたければ、暗号を解け。か。よくあるチェーンメールを似せたものだが・・・結構コツているな。誰かに渡せとは書いていないし、死ぬ期間が早い。」

「駿T、慣れてるんですか？」

「まあ、こんな様なやつはたくさん見てきたからな。よく以前の生徒からも相談を受けたよ。だが、ほっとけば誰も死ななかった。ただの悪戯だよ。」

そう面倒そうに言うのと、二人は首を振った。

「「そんなことはありません!!」」

息が揃って、勝と峻介はハイタッチした。

「そこまで言える根拠があるのか？」

「はい！！俺は、2日くらい前からちゃんと起きたんです。」

必死に言うのは勝。

「例えば？」

「……家族が、何かしら怪我するんです。毎日一回は。それも、普段では絶対ありえないような感じで怪我するんです。」

「意図的に、か。」

「そうです。あと、俺犬飼ってるじゃないですか。その犬も、やっぱり意図的に逃がされたんです。切ったかのような直線状の跡が、リードについていて。」

「それは災難だったな。……しかし、まだそれもこの手紙のせいだとは考え着かない。」

今度は峻介が口を開く。

「だったら俺のほうも聞いてください！俺は……」

指で数え始める。

「大体3個くらいあるんですけど。」

「言ってみろ。」

「……最近俺の自転車が壊れたじゃないっすか。先生も知ってますよね。」

「それはな。」

「その時は詳しく言いませんでしたけど、酷い壊れ方だったんです。どう見ても人がやったような……絶対、風とかの影響じゃないと思うんです。」

「そのせいで、今峻介は毎回歩きと。家から5 kmくらい離れていくのにな。」

「はい……。」

「2つ目は？」

「家のものが盗まれました。」

それには逞真も流石に真に受ける。

「俺の野球の賞状だとか、妹のランドセル……お金には困らないものなんですけど、実際地味に困ってるんです。」

「そうか。まだ良かったが……3つ目は？」

「パソコンが、一定の場面しか開かなくなりました。どんなにクリックしても、動かないんです。あ、パソコンにもともと付属していたワードとかゲームとかはできるんですよ。それを父さんが詳しく見てみたら、誰かが俺ん家のパソコンを選出して意図的にウィルスバスターに掛けたって。これはデスレターが関係してるんじゃないかって不気味に思っ、て、だから駿Tにい……。」

逞真は重い溜息を吐いた。

「そうになると、なんだかこれに関わっているように思えるな。大体いつこれが渡され、被害が起きたんだ？」

「うーんとお……約3日くらい前ですかね。もらったのは。」

「だね。本屋さんに二人で立ち寄って、会計待ってた時ですよ。前の人のポケットからこれが落ちて。しかも、俺たちを狙ったかのよう。開いてみるとこれです。はい。」

「3日……つまりあと2日でお前らは死ぬ、という設定だな。それはヤバいな。」

「先生、数学的なこと得意じゃないスカ。だから……ネ？」

逞真は眉を寄せ気味に笑って二人を見た。

「いいだろう。少し時間をくれ。」

「「わかりました。」」

また二人の息が合うと、ハイタッチした。

（まったく、のん気なものだ。）

それから逞真は家で暗号を解き始めた。

暗号に描かれているのは、今から言うようなものだ。

犬、麒麟、大根のように思われる野菜、制服、亀の甲。それらの上には2という数字。

逞真は頭を軽く使い、解いていく。

（こんな単純な暗号……。ただそれぞれの頭の2文字を読めば

いいだけのこと。ただ、犬だけは英語に直さなくてはならないようだがな。」

そして、解き終わると、逞真はゆっくり溜息を吐いた。

「さて、解いたぞ。どうするつもりだ？」

誰もいない部屋の中で、逞真は呟くのだった。

翌日、逞真は少々怒りを含め、彼らにデスレターを返した。怒り目？何故？

それは……二人の表情をみれば明確だった。

「……どうするつもりだ？」

何故それを二人に向けて言うのか、それもすべて二人の表情に出ている。

勝と峻介はニマニマして手紙を受け取った。

「やっぱり先生なら解いてくれると思いましたよ。」
「……………」

「ドッキリ大成功!!」

逞真は額に血管を浮きだたせる。

みなさんも考えてみよう。あの文字を2文字ずつ読むと”ドッキリ大成功”となるのだ。

「何のつもりだ？まさか、昨日のことは演出だったのか？」

「ハイ？」

「ふざけるな！」

教室中に逞真の声が響き渡り、注目される。

「まうた二人でなんかしたんでしょ？」

「演技上手いからなあ、神路と稲田。」

「そ。これは俺たちの悪戯の中の悪戯なんです☆」

「まったく、お前たちが死ぬと思うと、どれだけ寿命が縮んだと思ってるんだ？」

「ごめんなさい!!」

教室中は笑いに包まれた。まあ、これはいいのだが、なにかまだ終わっていないような雰囲気は逞真を襲ったのだ。

その日の帰宅時、逞真は見てみたい本があり、本屋に立ち寄った。

ぺらぺらと用のある本をめくり、ちょっとばかり立ち読みをし、本を閉じた。そして帰ろうと出口に足を進ませる。

その時だ。

ドンッ！・・・パサッ

「あ、すみません。」

図体のデカイ男にぶつかった。それとともに男のポケットから一枚の紙が落ちる。気にしないかのように男は去っていった。

逞真はその男を見詰め、その紙を取る。

（人が落としたものを、むやみに見るものではないが・・・）

あまりにもわざとらしく当たってきたようで、半分腹黒い思いが
逞真の中で芽生えた。

中を開いて、内容を見てみる。それは手紙のようだった。

（・・・なんだこれは。）

再び男の去っていったほうに振り返る。

（生徒ではなかったのは確かだ。しかし・・・）

内容に少し呆れる。こう書かれてあった。

”これを拾った者は、3日以内に描かれている暗号を解かないと、
死ぬ。他人に渡せば、その時点で渡した本人と、渡されたものを殺
す。また、時間が経つにつれて関係者が被害にあっていく。”

（またデスレターか。するとあの男は生徒の父親か何か？・・・
それにしても今回はもったこった内容だな。）

これも、生徒の可愛い悪戯だと、逞真は受け取ることにした。

それを陰で見ていた例の男が、暗い笑みを浮かべ、誰かに電話を
かけているなんて、逞真は知る由もなかった。

まさか、この行為が最悪な悲劇を起こすことになるだなんて・・・
・
・

第11話 謎の暗号大騒動★デスレター（後書き）

なんでしょうね、最後のためは。

次回もどうぞよろしくお願いします☆

第12話 謎の暗号大騒動★予想外な事件

しかし、逞真が拾ったその暗号は物凄く難易度の高いものだった。

「……一体なんだ？この暗号は。どこをどうすれば解ける。」

流石の逞真でも、不可能に近い。解き始めて何時間も経っていないが、早くも息詰まりを感じていた。

「3日以内に解ける自信は極めて少ないな……。それにしても、時間が経っていくにつれて関係者が被害にあっていく」とあったが……」

部屋のドアを開けて、萌の姿を静かに見つめる。

「関係者、か。萌に何も異常はないし、生徒からも何も連絡がない。やはり、嘘だったのかな。」

「え、何か言った？」

「いや、なんでもないよ。」

きょとんとする萌の顔を見て、逞真は微笑んだ。

2日目。この日も何も異変はなく、普段通り学校へ通勤していく時刻となった。

「行っってらっしやい、逞真。」
「ああ。」

その時、不意に萌が腕を掴んできた。

「?どうした。」
「う、うん。なんか・・・誰かに見られてる気がして・・・」
「なんだと?」

辺りを見渡してみる。

「だれもいる気配がないが・・・、大丈夫か?」
「う、うん。」

間
気を取り直して車に乗ろうとする。萌の腕が離れ、扉を開けた瞬間

「ぎゃっ!」

「お、おい。」

萌が急に転びそうになり、逞真のほうに倒れてきたのだ。逞真はしっかりと萌を抱き締め、そのまま運転席に腰かけた。

「本当に、大丈夫なのか？ 萌。」

「うん、本当だよ。でも・・・誰かに足を掛けられた気がして、転びそうになっちゃった。ごめん。」

「そうか？ 妊娠中なんだ、もっと体に気を付けてくれよ。」
「うん。ありがとうね。」

萌の様子に少し心配になりながらも、車のエンジンを掛けた。

学校で、自分のパソコンを開いてみる。

「・・・ハッ？」

思わず声を出してしまった。隣の斉藤先生がビックリして振り向いてくる。

「どうかしました？ 駿河先生が珍しい。」

「あ、すみません。少し予想外のことで心が混乱してただけです。」

「え？ 何があったんですか。」

「えー・・・それはですねえ・・・」

首を傾げて斉藤先生は画面を覗いた。

「・・・わぁ。」

「ですよね。」

逞真のパソコンの画面は、全体的に歪んでいて、マウスを動かしても、直接動かしても反応しなかった。

「ウイルスにかかったんじゃないですか？」

「そうかもしれないね。松田先生、どうにかできませんかね？」

技術家庭の先生（松田先生）に振り向くと、松田先生は逞真のパソコンの画面を見て、苦笑していた。

「いやあ・・・流石の私もこりゃ・・・」

「わかりました。修理にまわしますね。」

「駿河先生・・・許してちょんまげ？」

『ブフッ』

その席にいた一同はそのしらけさに笑いをこらえることはできなかった。

「あれえ？最近暑いはずなのに急に寒くなったなあ。」

梅木先生のボケで、なんとかフォロー成功。

それにしても、逞真のパソコンは理不尽な壊れ方だった。昨日までは正常だったものが、ウイルスで果たしてここまでなるのだろうか？

その、帰宅時のことである。いつものように部活が終わり、部員全員の帰りを待ち、残業を終わらせ、校外に出る。

すると、あまりにも意外なこと過ぎて、足を止めてしまう。

逞真の車だけが、どこにも見当たらなかった。

車だ。他の教師が盗んだりすることはできない。そもそも車のキーは自分で持っている。

だとすれば、考えられるのは部外者が合いカギをつくり持って行ったか、何かで運んだか……。どちらにせよ高度な技術がいることだ。

生半可な人では真似できない。

そう考えていくと、逞真はあることに気づいた。

これまでにあったことは、偶然にしては結構出来過ぎていた。

萌の様子、パソコンが壊れる、車が盗まれる……。ここまでくると、何故かあの暗号が関わっているんじゃないかと思ってしまう。

だが、これは生徒で考えた悪戯のはず。逞真は妙に思った。

（明日、クラスで訊いてみることにするか……。）

この日の帰り道は、歩きとなってしまった逞真であった。

3日目。今日の夕暮れ頃に本当であれば、死ぬ予定である。死ぬ予定というのも変な言い方だが、正しいのかもしれない。

逞真は暗号の紙を見ながら思い溜息を吐いた。そして教室に入る。

「今日は朝読書の時間を省略してくれ。話したいことがあるんだ。」

生徒の皆は首を傾げた。

「一体なんですか？駿T。」

「また先生みたいな不審者？」

「私みたいなのは余計だ。話に戻る。違うことなんだ。じつは・・・デスレターというものは知っているか？」

「駿T、それもうみんな知ってヤス。」

「勝と峻介の悪戯でしょ？」

「そうだ・・・だが、それがまた再び現れた。誰とは言わないが、被害に遭っている者もいる。心当たりはないか？」

生徒は顔を見合わせた。

「え？え？」

「別にオレもう何もしてないんだけど。」

「無実でえゝす。」

「ってかそんなのホントにあつたんだ。」

「わかった。もう結構だ。……そうか。生徒の中にいなくてよかったが、気を付けてくれ。本当にあるらしいからな。」

『はあゝい☆』

生徒にはそう言ったが、真面目に妙に思っていた。本当に存在したのかと。

職員室で、逞真はもう一度暗号の紙を見た。

本物なら、今日の夕方に、死ぬ。解けそうにない暗号。出したくないのに冷や汗が出てくる。

P R R R R

「もしもし。はい、はい。あ、駿河先生ですね。」

その言葉に振り向く。

「駿河先生、お電話です。妹さんの大学から。」

「だ、大学？」

逞真は首を傾げて受話器を耳に傾けた。

「はい、お電話代わりました。駿河です。」

『駿河聖奈のお兄さんですか？』

「はい。そうですが、妹が何か・・・？」

逞真はその内容を聞いて、目を見張った。

「ハアッ！？階段から落ちた！？」

職員室中が逞真に注目する。逞真はそれに気づき、少しポリウムを落とした。

「え、じゃあとにかくすぐ向かうので、そこにいろと伝えてください。では切りますので。失礼します。」

ガチャ

「駿河先生、急用ですか？」

「あ、はい。部活は自主練にしておくようにお伝えくださいますか？」

「わかりました。気を付けてくださいね。」

「ありがとうございます。」

すぐさま逞真は出ていった。車がないため、走るしかない。逞真はここから7キロくらいある大学まで久々に全速力で走った。

バンツ!!

大学の保健室を探し当て、勢いよく扉を開ける。

「あ、駿河さんですか？」

「はぁ・・・はぁ・・・はい。聖奈は・・・？」

この大学の医学部らしき人が微笑む。

「そこにいますよ。聖奈ー、お兄さんが来たよー。」

「うえっ!？」

無邪気な声がする。ひとまず胸を撫で下ろした逞真。
ベットの上で聖奈はあぐらをかいていた。

「おい、どういうことだ？聖奈。」

聖奈はポリポリと頬を掻いた。

「だから連絡しないでいいって言ったのに。」

「何言ってるんだお前は。」

「何してるんだお前は！」

口調を真似され、逞真は聖奈にデコピンした。

「なんだと？」

「部活はどうしたんだよ駿河先生よう!!」

「こんな連絡くらって行くはずがないだろう。お前のほうが部活より何より大切なん」

そこまでノリで言い掛け、逞真は咳払いした。

「失礼。それで？足はどうなっている。」

「ただのねんざだって。ね、そうでしょ？」

「んゝゝゝあとちよつと酷かったら骨折してたゝゝゝ」

「ウソォ!？」

「おいおいおいゝゝゝ」

逞真も呆れ顔。

「大丈夫なのか？痛くない？」

「そりゃ痛いわ。ここの階段何段あると思ってんの。」

「はぁゝゝゝ空元氣ってやつかゝゝゝ。で？」

聖奈は首を80度くらいまで傾けて

「でえ?？」

ととぼけた。

「馬鹿。どうして階段から落ちたのか訊いてるんだよ。」

「まるで自殺未遂のように言わないでよね!誰かに突き落とされたのっ階段の上から。」

「誰か?」

「そう。だって後ろからだっただもん。わかんないよ。」

「それもそうか。」

「ゼミを出て、帰ろうと思ったのね。そして階段下りようとしたら後ろからバンって。」

「心当たりはないのか？」

「ぜーんぜん。見たときに後ろ誰もいなかったし。でも学生じゃないと思う。今日はたくさんの人が出入りしてたから。」

「そう、か・・・」

逞真はまた沈黙した。これも、もしや暗号のせいではないかと。

「お前、どうするつもりだ？」

「どうするって・・・帰りたいんだけど。このあと授業ないし。」

「ところで歩けるのか？」

「うん！バッチこ」

と、足を伸ばしたその矢先・・・

「いってえええ！！！」

尋常じゃない痛さにその場にヘタツと倒れてしまった。

「やはりな。その足では歩けないだろう。」

「どうすりゃいいのよぉ！！！」

「・・・はあ。」

「よししょ。」

結局その帰り道は、逞真が聖奈を背負って帰ることとなった。

そとはもう夕方で、綺麗な夕日に二人の横顔が照らされた。

「兄ちゃん、車じゃないの？」

「言っただろう、盗まれたって。」

「・・・そ。大変ですね。」

「心配してくれてありがとうよ。」

少し沈黙が生まれて、不意に聖奈は逞真の首をギュッと絞めつけるように腕をまわした。

「ぐっ、苦しい。もっと優しく掴まってくれ。」

「はは。」

「何だよ急に、不気味。」

「なんかさー、兄ちゃんにおんぶされんの久し振りじゃんって思ってた。」

「え、まあ確かに。」

「昔だったらさー、こんなムクツチーじゃなかったし楽しかったのに。」

「負ぶさるのに楽しいもあるか？」

「・・・もっ！クール&鈍感・・・。」

そういえば10年ぶりくらいか、としみじみ思う。そうなる、
だんだん昔とは違うように思えてきた。逞真自身も、聖奈も。

そう、聖奈も。逞真の腰から見える白く細く、美しくなった腿も、
背中で感じる温かい弾力も、昔は存在しなかった。女というものは、
いつの間にかこんなにも変わるんだと逞真は今更気づいた。

「お前も成長したな。」

そんなことを呟くと、聖奈は横から顔を覗かせてきた。

「はい?？」

「いや、重くなったなあと思ってな。」

聖奈はムツとして耳元で叫んだ。

「どういう意味じゃコンニャク?!?!」

聖奈の家（元自分の家）に着き、逞真は妹をソファの上に下した。

「どーもっ！」

「済まなかったな、聖奈。」

「え、謝るのこっちじゃないんすかあ？」

逞真は不意に嘲笑した。

「今のきょんとした感じ、うちの生徒みたいだ。」

「なに？中学生みたいだとお！？」

「お前はもともと精神年齢大学生じゃないから。高校・・・いややつぱり中学生だな。」

「やつぱり馬鹿にしてんじゃん！！」

「先ほどのは忘れてくれ。」

「？ま、いっか。」

聖奈に見送られ、逞真は再び学校のほうへ足を進ませた。

（聖奈にまで被害が起きるとは・・・こうなると、本気でアレを解かなければな。）

その時、突然黒く大きな車がこちらに向かってくる。不思議に思っ
て眉根を寄せると、中からやはり黒いスーツをまとった人が出て
きた。

「・・・あの、どちら様ですか？」

少し警戒気味に言うと、答えてもらう隙もなく、横腹に衝撃をくらった。目の前が暗くなる。今思えばのことだが、それはスタンガンだった・・・。

第12話 謎の暗号大騒動★予想外な事件（後書き）

駿T!! おいおい、こりゃ学園ストーリーじゃないのかよ? いきなり黒に染まっちゃまったじゃねーかよ! って思いましたよね。

だって・・・最後のスタンガンってなんでしょう? WW
でも、とにかく・・・

次回もよろしくお願いします☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9915v/>

☆34ismadeupofateacher☆

2011年11月13日14時12分発行